錬金の戦士ハヤテ

羽田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金の戦士ハヤテ

【Ｎコード】

Ｎ４３０１Ｐ

【作者名】

羽田

【あらすじ】

ハヤテのごとくキャラで武装錬金のストーリーです。

割と原作に忠実です。

新しい命

「ハァハァ」

（夢だ！こんなのは夢に決まっている！！じゃなきゃあんな怪物、在るはずない！！）

柱の陰に隠れた青い髪の少年の目に映るのは少年より少し年上であろう眼鏡をかけ、短い髪の見たことのないセーラー服を着た女性と見た事も無い様な影だった。

（あの女気（ひと）づいていない！？）

「危ない！」

ドン！

少年は少女を突き飛ばす。

「！？」

ズガァ！！

少年の左胸が貫かれる。

（しまった！巻き込んだ！！）

女性は胸を貫かれた少年を見ながらそう思う。

「うわああッ！！？」
胸を貫かれた筈の青い髪の少年が叫び声を上げながら飛び起きる。
ガラッ！
「うるさいぞハヤテ！」
「どうしたのハヤテ？」
「全く、夜中ぐらい静かに出来ないのかよ」
ハヤテと呼ばれた少年の部屋に三人の少年が入ってくる。
「僕が殺されたァ！」
「寝ぼけてるのか？」
三人の中で一番背の低い黒髪の少年がそう呟く。
「しょうがない、僕が叩き起こししてやる」
「やめときなよ東宮」
眼鏡をかけた少年が止めようとするが
「やらせてやれよ一樹、まぁ確実に返り討ちだろうがな」
「何だと！この僕の力を見せてやる、よく見てろよワタル！くらえ通信空手拳」

東宮と呼ばれた少年がハヤテに向かって行くが……

「ギャー！！」

寄宿舎に響いたのは東宮の叫び声だった。

ヴィルルルル

四人は気づかなかったが、ハヤテの携帯にメールが届く。

「ちょっとォ、うっさいわよ男子！」

「どしたん～？」

「なんか二年の人が暴れてるみたい」

「えー、誰ぇ？」

ハヤテ達の騒ぎによって起きた女子生徒が不満を言う中、浮かない顔をしている生徒が居る。

（ハヤ太君なのだ…あの声…）

「もう止めなよ東宮、ハヤテには敵わないって」

「まだまだ！ぐぁぁ」

パチン

ハヤテ達によって騒がしくなった潮見高校寄宿舎の前で女性が携帯を閉じる。

「…大丈夫そうですね、とりあえず今は感謝して下さい、“錬金術”の力に……」

―翌日―

「おはようございます！！」

ハヤテが同級生達に元気よく挨拶する。

「おはよう綾崎君」

「オッス」

「聞いたよー、昨夜寄宿舎で寝ぼけて大暴れしたんだって？」

「クスクス」

どうやら昨夜の騒ぎはかなり広まっているようだ。

「情報早ッ！密告者は誰です？」

「僕だァァ！！」

ビクッ

「東宮さん！」

現れたのは昨日ハヤテに返り討ちにされた東宮だった。

「見ろ！口が語らずともこの傷が全てを語る！」

東宮が服をめくり、ハヤテに傷を見せると

ダダダ！

近くに居た女子生徒達は逃げていってしまった。

「すいません、寝ぼけてたみたいで…」

「ホント昨夜は大変だったんだよ」

「西沢さん」

「で、いったいどんな夢だったんだ？」

「ワタル君」

昨夜騒いでいた四人が揃う。

「それが、痛いは恐いはで最悪の夢で、おまけになんかすごくハッキリ覚えているし」

四人はハヤテの夢の話をしながら歩いている。

「学校裏の廃墟？」

「ああ、オバケ工場ね」

「そうです！そこに、知らない制服の女性がいて、得体の知れない怪物に襲われそうになっていた所を助けて…」

「フンフン」

「代わりに殺されちゃったんです」

ハヤテが涙を浮かべながらそういうと。

「「倒すんじゃないんだ？」」

「そんな事言ってるうちに始業ベルが鳴ってる」

三人に一樹がそう告げる。

キーン　コーン

「うあぁ走れ！」

3人が校門に向けて走り出し、ハヤテは遅れて走っている。

「やべッ、今週の門番、薫だ！」

「急げ！！」

「セーフ！」

三人はなんとか間に合った。

「遅いぞハヤテ」

「なんの！ここからがダッシュの見せ所です！」

ハヤテが校門に向かって走り出すと

「ハァハァ…」

「お！」

「あ！」

「泉さん、入学早々遅刻ですか？」

「ハヤ太君！ち、遅刻なんてしないよ！まだ間に合うよ、そうだ！ハヤ太君おんぶしてよ」

ハヤテの妹、綾崎泉がハヤテにそう言うとハヤテは

「流石にそれは…せめて手を引っ張りますよ」

そう言って、泉の手を引いて校門に走っていくハヤテ。

カーン　コーン

最後にハヤテが泉を先に校門に入れた途端、鐘が鳴り終わる。

「セーフなのだ」

「アウト……」

ガァッ

息を切らして休憩していた泉の頭に勢いよく門が迫る。

「！？」

「危ない！」

ハヤテが咄嗟に泉を突き飛ばし、左手で門を止める。

ドクン

ハヤテの左胸に六角形の影が浮かぶ。

ガシャア！！

「ハヤテ！」

「ハヤ太君！」

「危なかったー、間一髪でした！」

ハヤテは門の内側に座り込んでいた。

「大丈夫でしたか？」

「それはこっちの台詞だよ！」

ザッ

「新入生か…1秒遅刻、減点1！」

「！」

泉とハヤテの下に校門に居た教師、薫がやってくる。

「3で罰当番だ、覚えておけ」

そんな薫にハヤテが言う。

「泉さんはセーフですよ」

「い、いいよ、それより早く保健室に行かないと」

「アウトだ」

薫はハヤテと泉にそう告げた。

「じゃ、泉さんの分も引き受けて、僕が減点2ってコトで！」

「大丈夫ハヤテ？」

「右手痛くない？」

そんなハヤテ達を

ハヤテが泉の分も引き受けて減点2になったが5人は教室に向かい、

そんなハヤテ達を薫が見ている。

「ちっ、相変わらず何考えてるかわかんねー目してやがる」

「しっ、聞こえるよ」
ここで薫が何かに気付く。
「待て！」
ビクゥ！！
「カバン…お前学校指定のカバンはどうした？」
「すいません、朝起きたらなんか見当たらなくて」
ハヤテがそう答える。
「失くしたのか、帰りはどこに寄った？」
「えーと…」
（あれ？）
「…まぁいい、減点3で罰当番だ、放課後中庭の草むしり」
「ええ！！」
「終わるまで帰るな、夜までかかって構わん」
「えええ！？」
「予鈴だ行け、それともまだ減点が欲しいか？」

慌てて教室に向かうハヤテ達を薫が見ている。

（見ツケタ…）

―昼休み―

「なんかよ、薫のヤツ最近おかしくないか？」

「そうかな？前から学校一とっつきにくい教師だったと思うけど？」

外でワタル、東宮、一樹が昼食を食べながら話している。

「あ、見ーつけた！」

そこに泉がやってくる。

「よう、ハヤテ妹」

「あれ？ハヤ太君は？」

泉がハヤテが居ない事に気付く。

「ハヤテなら飲み物の買い出し中」

「あー、じゃんけん弱いもんねー♪」

「入学おめでとう」

「ありがとう」

「制服似合ってんじゃねーか」

一樹が泉の入学のお祝いを言い、ワタルが泉の制服を褒める。

「お待たせしました」

ハヤテが飲み物を抱えてやってきた。

「良かったぁ、実を言うとこの制服に憧れて、私この学園目指したんだ！」

嬉しそうにしている泉にハヤテが言う。

「ゴキゲンですね、泉さん」

「うん♪」

「今朝のコトが心配で来たけど、元気そうでなによりだよ」

「いや、実はそうでもないですよ、なんか心臓がまだちょっとズキズキって」

ハヤテの元気な姿を見た泉は安心するが、実際は心臓に痛みがある様だ。

「あ」

ハヤテの携帯にメールが届く。

「しかしよくまぁ、オマエは無茶ばかりするよな」

「そうですか？」

「そうだよ、今朝は運良く大したコトもなく済んだけど、もし大ケガでもしてたらどーする気？」

「考えたコトもないですねぇ」

「少しは考えろよ」

「まぁ僕の場合考えるより先に体が動く性分ですから仕方ないですよ、泉さんが無事なら多少のケガは問題なしですよ」

ワタル達は色々と無茶をするハヤテを心配するが、ハヤテはあまり気にしていないようだが

「お前、いつか昨夜の夢みたいに死ぬぞ」

「それは嫌ですね、あんなに痛いのも恐いのもまっぴらです」

流石にワタルが言った様な状況になるのは嫌らしい。

キーン　コーン

「おっと予鈴だ」

「いけない、私、次体育だった！」

そう言って泉は最後にハヤテに言う。

「ハヤ太君」

「！」

「今朝はありがとうね、それとやっぱり罰当番、私も手伝おっか？」

「一人で大丈夫ですよ、それより多分帰りが遅くなりますから、僕の分の夕食をちゃんと取っておいて下さい」

「らじゃーなのだ！」

「頼みましたよ」

泉を見送ったハヤテは、自分にメールが来ていた事を思い出す。

「そうそう、メールが来てたんでした」

ピッ

ハヤテに来ていたメールにはこう書かれていた。

〔新しい命
大事に扱いなさい〕

「……なんだコレ？」

ハヤテは気づかなかったが、屋上の貯水槽の上には昨夜ハヤテが助けた女性が立っていて、ハヤテを見ていた。

「……平和な街、けど敵(やつら)は必ず潜んでいる」

時刻は９：１０過ぎ、職員室に居た薫が学生用のカバンを持ち立ち上がる。

「さて、そろそろ頃合いか」

「やっと終わった、フー」

ハヤテがやっと罰当番の草むしりを終える。

「うわ！もうこんな時間、どうりで誰もいないわけだ、報告済ませて早く帰らないと」

ハヤテは報告する為に薫の下に向かおうとする。

「それにしても夜の学校ってどうしてこう…あ！」

辺りをキョロキョロと見渡していたハヤテの目に飛び込んで来たのは…

「裏山の…オバケ工場…」

ハヤテは新しい命という言葉や心臓を貫かれたイメージを思い出す。

「なんだか今日はロクでもないな、報告は明日にして帰ろう」

ハヤテが帰ろうとすると

「どこへ行く？」

誰かがハヤテに声をかける。

「あれ？どこへ行くの？」

外に出かけようとしていた泉に東宮が話しかける。

「あ、ウン、ちょっとハヤ太君を迎えに、なんか今頃一人でブルブルガタガタしてると思うんだ」

「偉いな」

「それに、もしまだ罰当番が済んでなかったらやっぱり手伝おうかなって」

一方ハヤテの前には薫が居た。

「罰当番は済んだか…まぁそれはどうでもいい」

「え？」

「本来の用件はこっちだ」

そう言って薫は学生用のカバンをハヤテに放る。

「！」

そのかばんを見たハヤテは。

「僕のカバン！いったいどこで」

「裏山の廃工場」

その言葉を聞いたハヤテが固まる。

「それは昨夜、私の食事を邪魔した輩が落とした物…２－Ｂ綾崎ハヤテ、キサマか…」

パキ　パキ　パキ　パキ

薫の顔や体に音を立ててヒビの様なものが入っていき、声も変わっていく。

ドクン！！

「なんだろ、心臓が凄く痛い」

「心臓を串刺しにして殺したはずだが」

「そうか、これも昨夜と同じ夢なんだ」

ハヤテは近くにあった鉄パイプに手を伸ばす。

「じゃなきゃ僕が生きているはずがない」

グッ

ハヤテが鉄パイプを握る。

「まぁいい、それで生きているなら今度こそ…」

パキ　パキ　バキ　バキ

「確実に殺す！！」

「！？」

薫の姿が金属の皮膚をした巨大な蛇に変わる。

「わぁあああッ！！」

それを見たハヤテは逃げだす。

ズガァ！！

巨大な蛇となった薫の口が迫るがなんとか避け、逃げるハヤテ。

「ハァハァ」

（夢じゃない！夢なんかじゃ無かったんだ！！）

そう思いながら必死で逃げるハヤテ。

ヴィルルル

ハヤテの携帯に着信が入る。

ピッ

ハヤテが電話を取ると

「三分で行く、それまで持たせて下さい」

携帯から聞こえて来たのは昨夜ハヤテが助けた女性の声だった。

「やっぱり…！アレは何なんですか？貴女は誰なんですか！？」

女性はハヤテと会話しながら学校に向け走っている。

「僕はいったいどうなっているんです！！」

ガチィン！！

「うわあッ！」

薫の口がまたもやハヤテに襲いかかる。

「私も移動しながらでは話しづらいので、掻い摘みますがいいですか？」

「お願いします！」

「アレの名称は“ホムンクルス”人に潜み、人に化け、人を喰らう怪物です」

「人を…喰らう！？」

「私はアレを追ってこの街にやってきました、そして昨晩、貴方を巻き込んだ」

「巻き込んだって…それで僕はいったい…」

ハヤテはそう尋ねるが…

「キシャァァァ」

ビクッ！

「やばい、追いつかれる！！」

怪物と化した薫の声を聞き、逃げることに専念しようとする。

「そうですか、なら致し方ないですね、“力”を使うコトを許可します、戦え！」

「！？」

「力？力って何です？戦えって、あんな怪物とどうやって！？」

ハヤテは突然戦えと言われてもどうやったらいいのか分からない。

「そうですか、まだ全てを思い出してはいませんか…」

「逃げ切ります！」

ハヤテがそう言うと

「無理だ」

即座に返事が返ってきた。

「ヤツラはその存在を秘匿するために、目撃者を放っておきません、どこまでも追い詰め、必ず始末します」

ハヤテが角を曲がるとそこには泉が居た。

「巻き込まれたらもう…逃げ場などありません」

「びっくりしたぁ、どうしたの恐いカオして？」

「泉さん、なんでここに？」

お互い急に出会ったことに驚く。

「ハヤ太君が遅いから迎えに来たんだよ、早く帰ろうよ、夕御飯ちゃんと取っておいたから」

（しまった！巻き込んだ！！）

バッ！！

ハヤテは振り返り、来た道を逆走する。

「！」

「逃げて下さい、僕がなんとか足止めしますから！」

「何？何のコト、どうしたのハヤｔ

突如走り出して、逃げろと言ってきたハヤテに泉が訳が分からず、

問いかけようとすると

ボゴォッ

「え？」

地面の中から現れた強大な口に丸飲みにされる泉。

ドクン

ハヤテの左胸が一つ鼓動する。

ゴクン！

「空腹のままこの形態で動くのは少々こたえる、昨夜食い損ねた分の代わりはこれでよし」

口の中から出て来た蛇の巨大な舌の先端には薫の顔があった。

「うぉぉぉ！！」

ハヤテは振り返り、泉を丸飲みにした薫に突っ込んでいく。

「返せ！！」

ドガァ

『良かったぁ、実を言うとこの制服に憧れて、私この学園目指したんだ！』

ガゴ！バキ！ガキ！ゴキ！ドガ！ゴス！

「泉さんは関係ないだろ！返せ返せ返せ返せ返せ返せ！！」

そう叫びながら手に持っていた鉄パイプで薫の顔を滅多打ちにするハヤテ。

「調子に乗るなよ」

鉄パイプが曲がってしまうほど殴り続けられ、顔がボロボロになった薫が言う。

「無駄だ！！」

ドシュウ！！

薫の尾での一撃を鉄パイプで受け止めるハヤテだったが、鉄パイプは折れ、吹き飛ばされてしまう。

ドガァ

「“錬金術”によって造られたこの体は“錬金術の力”以外は受け付けない」

木に叩きつけられ血だらけになったハヤテに、すっかり顔が元通りになった薫が言う。

（錬金術の…力……？）

『“力”を使うコトを許可します、戦え！』

ドクン！！

学校の貯水槽の上、心臓を貫かれ虚ろな目をしたハヤテに女性が話しかける。

「聞こえますか？貴方は死にました、もう心臓が使い物になりません、事態測らず、力量を省みず、考えなしに飛び込むから…けれど、私を助けようとしてくれたんですね…貴方に少し興味が湧きました」

女性はそう言うと六角形の金属を取り出す。

＜“核鉄”！“錬金術”の粋を集めて精製された超常の合金＞

「これは人間の精神のいちばん深い所、本能に依って作動します」

女性はハヤテの左胸に核鉄を近づける。

「これを心臓の代用品にして生存本能を揺り起こします、貴方はもう一度生きる力を手にします、そして同時にもう一つ別の力を手にする」

核鉄がハヤテの胸に埋まっていき、鼓動を始める。

「それは人の闘争本能に依って作動する戦う力！」

ドクン

ハヤテがなんとか立ち上がる。

『その力こそが核鉄本来の用途…持つ者が秘めたる戦う力を形に変えた、唯一無二の武器の創造！』

「あきらめの悪い…お前の命は昨夜既に尽きているはずなんだ、妹と仲良く喰われろ」

『掌握！決意！そして咆哮！その名称』

「喰いたければ喰えばいい、ただし泉さんは返して貰います！武装錬金！！」

バクン！！

薫がハヤテを丸飲みにする。

「世迷言に付き合うヒマはない、貴様はもう大人しく死んでいろ、後は昨夜の女生

ドン

「な、なんだ？これはいったい！？」

ド　ド　ド　ド

突如薫の様子がおかしくなる。

ゴオッ！

「ぎゃああッ！！」

蛇の頭の部分から槍が突き出し、薫が悲鳴を上げる。

「泉さんと僕の命、返して貰います！！」

ガキン　ドオッ！！

蛇の頭が吹き飛び、中から泉を抱え槍を持ったハヤテが飛び出してくる。

「武…武装錬金…！！何故貴様如きがソレをォ！？」

宙に居るハヤテに薫が反撃しようとするが

「突撃槍（ランス）の武装錬金か、考えなしで飛び出す貴方の性格そのままですね」

間に誰かが割って入る。

「武装錬金　バルキリースカート！！」

突如現れた眼鏡をし、顔に一文字の傷がある女性の足には片足にごとに二本の可動肢が付いており、その先端には一枚ずつのブレードが付いていた。

バシュ　バシュ

その四本のブレードによって薫の攻撃を破壊し、顔を貫いた。

「処刑鎌（デスサイズ）の武装錬金……そうか…オマエは錬…金の」

「コイツらの急所は額の章印です、覚えておいてください」

「貴女は…」

「それから…着地に気をつけないと死にますよ」

その言葉でハヤテは自分が空中にいることに気付いた。

「高い！」

「思い出しました、僕、昨夜下校の途中でオバケ工場に灯りを見つけて行ってみたら貴女が薫先生に喰われそうになっていて」

なんとか着地したハヤテは気絶している泉に上着をかけてあげ、突如現れた女性と話しをしている。

「思わず助けようとして飛び込んで、貴女の尊い犠牲になった「違います！喰われそうになってたんじゃなくて、無防備を装ってヤツを誘い出しただけです」

ハヤテの言葉が遮られる。

「ホントですか？」

「ホントです」

「勘違いで死んじゃったんですか僕、うわぁヘッポコ過ぎ」

ハヤテが落ち込んでいると

「ん…う、ん…」

泉が声を上げる。

「！泉さん大丈夫ですか！」

ハヤテは持っていた槍を放って、泉に駆け寄ろうとするが

ガクン

「わっ」

ガシィ

倒れそうになったハヤテを女性がバルキリースカートを使って持ち上げる。

「慌てないで下さい、貴方よりはずっと大丈夫、体に異常は全くありません」

「そうですか、それを聞いて安心しました」

ハヤテがホッとしていると女性はハヤテを下し言う。

「…不思議な人ですね、昨夜といい、今といい…痛いのも恐いのもゴメンというくせに人のコトとなると危険を全く省みない、勇猛果敢なのか、ただの考えなしなのか……」

武装錬金を解除した女性が言う。

「どちらにせよ貴方のコト、少しだけ気に入りました」

その言葉を聞いたハヤテが赤くなる。

スッ

「！」

女性がハヤテが放った槍をハヤテに差し出す。

「もっと大事に扱って下さい、コレは私のモノと違い心臓の役割も兼ねているんです、奪われたり、壊されたりすれば今度こそ本当に貴方は死ぬ」

『貴方の新しい命です』

『人を喰らう錬金術の怪物！それを追って現れた錬金術を識る女性！！そして僕の新しい命　武装錬金！！』

「で！“錬金術”ってなんですか？」

ハヤテがそう問いかけると女性は呆れたように言う。

「辞書にだって載っていますよ、知らないんですか？」

「さっぱり」

「いいですか、錬金術というのは…」

ミッドナイト・ラン

「れ……れ【錬金術】あった！」

ハヤテとホムンクスを追っていた女性、ソニア・シャフルナーズは泉を保健室に寝かした後、資料室にある辞書で錬金術の意味を調べていた。

「本当に辞書に載ってたんですね」

「だから言ったでしょう、読みますよ、【錬金術】〈近代より前、全ヨーロッパを風靡した原始的な総合科学技術、鉛などから金への変換や不老不死の薬の製出などを試みた、これらは成功はしなかったが種々の技術の発達を促し、近代～現代科学の基礎となった〉」

かぁぁ

ソニアの肩が当たっている事により顔を赤くするハヤテ。

「？どうしましたカオが変ですよ」

ハヤテの様子が変なことに気付いたソニアが言う。

「な、なんでもないです！コレが生まれつきなんです！」

「そうですか…それは大変ですね」

慌てて誤魔化したハヤテだったが辞書の内容に疑問が浮かぶ。

「あれ？ちょっと待って下さい、今確か〈成功しなかった〉って」

ソニアが答える。

「ここに載っているのはあくまで常識の事までです、錬金術は二つだけ、常識では測れない超常の成功を収めました、それが《ホムンクルスと武装錬金》」

二人は泉を寝かした保健室に戻ってきていた。

「ホムンクルスは人造生命の研究の産物、武装錬金は戦術兵器の開発の成果、しかし共にあまりにも危険でした」

「はい、危険ですね！僕だって恐かったし痛かったし死ぬかと思いましたし」

ハヤテが震えながら涙目で言う。

「結局この二つは徹底的に秘匿され、錬金術を識る者達の手で管理される運びとなりました、ですが」

ソニアがカーテンを開けるとそこにはオバケ工場が見えた。

「その手を逃れたモノは今日世界中に散らばり、闇に紛れて人間を喰らい続けています」

「オバケ工場！」

「ホムンクルスのアジトです、これから残党を斃しに行きます」

ソニアは核鉄を取り出す。

「武装錬金　バルキリースカート！！」

ソニアは武装錬金を発動させる。

「よ…よし、僕も行きます！何か手伝えることがあったら」

ハヤテが覚悟を決めてそう言うが

チク　チク　チク

「痛！痛い」

ソニアにバルキリースカートの関節部分の少し尖った所で突かれる。

「貴方の事だからそう言うと思いましたよ」

ソニアはそう言うと今度はブレードの部分をハヤテに向ける。

「貴方は来ないで下さい、貴方に核鉄を与えたのは戦わせるためでなく、助けるに値する命だと感じたからです、武装錬金やホムンクルスについて教えたのはちゃんと事態を把握して冷静に対処して欲しいから、宣告は緊急回避として致し方なかったですが、“戦闘”は本来私の任務です」

ゾク

「アジトは大体４～５体単位、一晩あればカタがつきます」

ハヤテはソニアの様子に寒気を覚えるがそれでも喰い下がる。

「で、でもやっぱり」

チク　チク

「痛い！痛い！」

再度ソニアに突かれるハヤテ。

「だから来ないで下さい！よく考えて下さい！妹さんはどうするんですか？悪夢で恐い思いをして目を覚ましてみたら、夜の保健室に独りおいてけぼりですか？」

「あ……」

泉の事を思い出し、ハヤテが止まる。

「自覚がない様だから言っておきます、貴方は今将来を決めようとしています、帰れば元通りの世界、来れば戦いの世界」

『自分の住む世界がどちらか言わずともわかるでしょう？』

ガララ

ソニアが窓を開ける。

「貴方は来ないで下さい、来てはいけない、妹さんと一緒に帰って下さい」

ソニアはそう言って窓からオバケ工場に向かって行った。

「ん…ほえ？あれれ？なんだろ…なんか凄く恐い目に遭った様な…」

気絶していた泉が目を覚ます。

「良かった、目が覚めたんですね」

「そっか、私校庭で転んで頭打って…」

ハヤテから気絶したのは転んで頭を打ったからと聞かされた泉。

「わわ？なんか寒いよ？」

「上着着てないからですね、はい」

ハヤテは泉の上着を後ろから掛けてやる。

「ありがとう」

「泉さん、今身長どのぐらいでしたっけ？」

ハヤテが泉に尋ねる。

「ほえ？何いきなり？１５７？だよ」

（泉さんよりは大きかったとはいえ、あの肩…僕よりは小さかったな）

ハヤテはそう思いながら何か決意した様な顔をしている。

「わ！何コレ、窓開けっ放しだよー、いつから？」

「３０分ぐらい前からです」

「そんなに？道理で寒いワケだよ」

ピシャッ　シャッ

泉が窓とカーテンを閉める。

「これでいいのだ☆さ、早く帰ろう！」

泉がハヤテにそう言うと

ガシィ

「分かりました、早く帰りましょう！」

ハヤテが泉の腕を掴みそう言いう。

「う、うん」

「では失礼します」

「ほえ？」

そう言うとハヤテは泉をお姫様抱っこする。

「ど、どうしたのハヤ太君？」

突然抱き上げられ驚く泉。

「行きます！」

ダダダダダ

そのまま走り出すハヤテ。

その頃オバケ工場では。

ドドドドッ

「ゲッ」

ソニアのバルキリースカートのブレードが猿型のホムンクルスに刺さる。

「臓物（ハラワタ）をブチ撒けろ！！」

猿型のホムンクルスがバラバラになる。

「女だ！得物だァァッ！！！」

「得物は貴様等の方よ！！」

（数が多過ぎる、これはアジトなんてレベルじゃない）

オバケ工場にはソニアの予想を超えた十数体の猿型のホムンクルス

とホムンクルスの形態ではなく人間の姿をした者が一人居た。

「昨夜、薫が話していた女…」

「ラストッ！」

とうとうリーダー格らしき男以外に立っているホムンクルスが居なくなった。

「そうかオマエ、〝錬金の戦士〟だな、錬金術を識る者の中から選り抜かれた武装錬金の熟練者！」

パキ　パキ

男が姿を変えながら言う。

「だか、たった一人で乗り込んで来て勝てると思うな！！」

「私は常に一人です、一対一来なさい！！」

男は虎を模したホムンクルスに変わる。

ガシィ！

「！？」

ここで突然ソニアの足が何者かに掴まれる。

「やりましたぜタマさん！」

「チッ、死骸に隠れて」

ソニアの足を掴んだのはソニアが作ったホムンクルスの死骸の山に隠れていた一体のホムンクルスだった。

「一人は辛ぇな！錬金の戦士！」

身動きを取れなくなったソニアに襲いかかる虎のホムンクルスのタマ、そこに

「うおおおッ！！」

ハヤテが突っ込んで来る。

「「！？！」」

突然のハヤテの登場に、ソニアもタマも驚く。

「武装錬金！！」

「ただいまぁ～」

「お帰り、泉ちゃん」

「あれ、ハヤテは？」

寄宿舎に帰って来た泉にゲームをしている東宮、それを見ていた一樹とワタルが話しかける。

「玄関まで一緒だったんだけど、用事があるってまた外に」

「こんな夜更けに？明日じゃダメなのかよ？」

「うん、私も聞いてみたんだけど、なんかねどうしても今行きたいんだって」

突撃槍の武装錬金を持ったハヤテがタマに突っ込んで行き

バシィッ

タマはそれを止める。

「なんだ、伏兵はお互い様かよ、この俺と力比べか？面白ェ！！」

「突き破れ！僕の武装錬金！！」

バチィッ

「！飾り布がエネルギー状に！」

ズブ…

ハヤテの武装錬金の飾り布がエネルギー状になると、止められていた槍先がタマの章印を貫く。

「この武装錬金は強力だ！！！」

ビタァ！！

「へべッ！？」

ハヤテはタマを突き破った勢いのまま壁に突っ込んでしまう。

（これで撃破二体目）

ハヤテが薫に続きタマをも倒した事に驚くソニア。

「タ、タマさんー」

ハッ

「来ないで下さいと言ったでしょう！！」

ザシャァ

「ぐえッ！」

ハヤテに怒鳴りながら自分の足を掴んでいたホムンクルスに止めを差すソニア。

「妹さんはどうしたんですか？まさか！」

「大丈夫ちゃんと送ってきました！」

泉の事を聞いてきたソニアにハヤテが答える。

「泉さんを抱えて全力疾走３０分！でもまだ元気イッパイです！」

「イッパイイッパイです！」

ハヤテの膝はわらい、息は切れていた。

「…足元をよく見て下さい」

「え…」

ハヤテが足元を見ると

「！！！」

そこには人の骨が転がっていた。

「言ったでしょう、ホムンクルスは人喰いだと、どうやらココはただのアジトじゃない様です、この場の敵は全滅させましたが、おそらくまだ街のどこかにこの人喰い共は潜んでいます」

「そんな…あんな化け物がまだ」

「思ったより悪い状況です、今度こそ貴方は手を引いて下さい！」

ソニアがそう言うが、ハヤテは。

「だったらなおさら引けません、泉さんやワタル君達が危ない！、僕には貴女がくれた戦う力を持っています」

ソニアはハヤテに肩を貸しながら言う。

「私は貴方のためを思って、言っているんですが」

「ありがとうございます、でもゴメンナサイ、どうしても僕、この

ままジッしていられないんです、化物退治！僕も手伝います！！」

（……昨夜とは違う、今度は全て知った上で飛び込んで来た、そして更に危険を承知で飛び込もうとしている、綾崎ハヤテ、この少年は正しい戦士の資質を秘めている！）

「駄目だと言ってもどうせ聞く気ないんですよね？」

「はい」

その返事を聞いたソニアは

「よし分かりました！戦士見習いとしてコキ使ってあげます！！ただし目の前で死なれるのは二度とゴメンです、以後、私の指示には絶対従うコト！いいですね！」

そう言い、ハヤテは敬礼する。

「了解です！」

ミッドナイト・ラン（後書き）

お気づきの人が居るかはわかりませんが、ソニア（斗貴子）の名前が出て来るタイミングが違います、本来なら漫画ならこの次の話の冒頭、アニメならこの話の最後のはずでしたが、名前無しのまんま書くのがきつかったんです。

ホムンクルスの正体

「ソ・ニ・ア　シ・ャ・フ・ル・ナ・ー・ズ」

ハヤテの携帯の電話帳に載っているソニアの名前を東宮が読み上げる。

「ぎゃあああ！ハヤテの携帯に女の名前がー！？」

「きゃあああ！東宮君のエッチー！！」

東宮がハヤテの携帯に女の名前が入っていたことに叫ぶとハヤテは東宮に携帯電話を見られたことに叫び声を上げる。

ざわ　ざわ

「エッチなんだ」

「エッチな東宮君」

「東宮はエッチ」

周りに居たクラスメイトがざわざわと騒ぎ出す。

「違ーう！！」

「人の携帯勝手に見るから」

必死に否定しようとする東宮に一樹が呆れたように言う。

ヴィルルル

ハヤテの携帯に電話がかかってくる。

「あ、ソニアさん」

ハヤテは電話を取ると、クラスメイト達から離れながら話しだす。

「ハイ、なんかちょっと疲れが抜けませんけど、大丈夫です」

「うわあ～どうやら妄想彼女じゃなさそうだね」

「くそう、何喋ってるんだ！」

「放課後オバケ工場で待ち合わせだとよ」

ワタルが一樹と東宮にそう言う。

「聞こえるの？」

「いや、ただの読唇術だ」

「お前は何者だ！？」

読唇術とか言い出したワタルに東宮が突っ込む。

「ナムアミダブツ　ナムアミダブツ」

ハヤテはオバケ工場の隅に作った墓に手を合わせている。

「アーメン」

「何をしているんです早く上がって来て下さい」

そんなハヤテをソニアが呼ぶ。

「犠牲になった人の亡骸、勝手に埋葬してしまいましたけど、よかったんですかね？」

「死者に礼を尽くすのは悪い事ではないと思いますけど」

「そうですけど、警察に知らせるとか」

「それは私の任務ではないですから、私の任務は戦うコトです！第一この件は警察には解決出来ません、出来るのは身元確認ぐらいですが、それは解決の後でいいです、まず私達がやらないとならないコトは」

「それなら僕も考えて来ました！」

ハヤテはソニアに真面目そうな顔で言う。

「とりあえず、まず僕の突撃槍にカッコいい名前を！さぁどれですか！！

？ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロングＤＸ

？トンボ切り２０１０年

？シンプルに“槍”

？意表をついて“木刀　正宗”」

「そんなのは更に後でいいんです！まずは敵の把握と捜索です！」

「せっかく徹夜で考えたのに……」

「疲れが抜けない原因はそれですか！寝て下さい！しっかり！！」

徹夜で武装錬金のしょうもない名前を考えていたハヤテにソニアが青空説教をする。

「貴方が学校に行っている間にココを調べて見ました、結論から言うと、ココはアジトではなく、ホムンクルスの研究室です」

オバケ工場の中に入ったハヤテとソニアの前にはフラスコの様なものがセットされた機械があった。

「何ですかそれ？」

「地下で見つけたホムンクルスの本体培養器です」

「本体？」

「生物の細胞をベースにして造られる、サイズは約３ｃｍ、密閉フラスコ等の狭い閉鎖空間の外では一日と持たない脆弱なモノです」

『だが、その脆弱な本体が人間の脳に寄生すると、肉体を奪い取り全身を変質させ、ベースとなった生物を模した人喰いモンスターと化す』

「！！じゃあ」

「貴方が倒した薫もタマも本人のなれの果て、一体につき一人の犠牲、エサとして更なる犠牲」

「……犠牲者だらけですね」

「そうです、それを知っていて何者かがココで化物を研究、製造していたんです、喰いとめられるのは貴方と私の武装錬金だけです」

「でも、いったい誰が？何のために？」

ハヤテとソニアが話している、その上空には、巨大な大鷲を模したホムンクルスとその上に立っている学生服の男。

「高校生が男女一人ずつ、女の方は見た事もない制服、男の方は創造主と同じ学校の制服だ、攻撃するか？ここからでも仕留める自信はある」

大鷲のホムンクルスがそう言うと、ホムンクルスの上に居た男が答える。

「いや、ここは一つ、友好的にアプローチしよう」

男がホムンクルスの本体の入った密閉フラスコを取り出す。

「この近隣に住む錬金術に関わりを持つ何者か、目的を推測するコトは可能ですが、今の段階では断定出来ません、断定出来るコトはこの創造主は人の命を命を思っていないコトと、自分の研究のためなら手段を選ばないというコト」

「！ソニアさん！！」

ソニアに向かって人の胎児の様な姿をしたホムンクルスの本体が落ちて来る。

「！私に触れるな！」

ソニアがバルキリースカートを発動させ、ホムンクルスの本体を弾き飛ばす。

ブシュッ

ソニアの首筋から血が出る。

「上空！！」

ソニアの指示にハヤテが

「武装錬金！！」

武装錬金を発動する。

「弾かれた」

「残念、仲良くなれれば核鉄の研究も出来ると思ったんだけど仕方ない」

「マキナ、攻撃だ！」

ドゥ！　キィィィィ

大鷲のホムンクルス、マキナが上空から迫ってくる。

「！来るッ！！」

ソニアも上空の敵に気付く。

「“突撃槍”を空に撃って！」

「え！？」

「その武装錬金の威力ならヤツより早く届きます！！武装錬金は闘争の本能から発した己の分身、必ず扱える！信じて下さい！！」

『食い止められるのは貴方と私の武装錬金だけです』

ソニアの言葉にハヤテが

「突き破れ！僕の武装錬金！！」

ハヤテが突撃槍の武装錬金を向かってくる敵に向けて投げ、ソニアが飾り布に掴まり、一緒に敵に向かって行く。

「！！」

「回避だ！」

マキナがハヤテをかわすが

「逃がすか！！」

「！！」

ハヤテの武装錬金の飾り布を掴んでいた、ソニアが創造主の前に現れる。

「驚いた、これが錬金の戦士か」

顔を上げた創造主の顔にはパピヨンマスクをしていた。

「バルキリースカート！！」

バシュッ！！

「チッ」

（速い！）

ソニアがバルキリースカートで攻撃するが、かわされてしまう。

「大丈夫か創造主」

「ああ、しかしまさか布にからまって上空まで攻め入るとは」

（侮れないな、あの“処刑鎌”の女、それともう一人“突撃槍”の男！）

（手掛かりはつかんだ、あの学生服は…ハヤテさんと同じ学校の男！）

ヒュウウウ

「大丈夫ですかソニアさん、ソニアさんッ！」

落ちて来るソニアをハヤテが受け止めようとするが

ズドン！　ガガガッ！！

ハヤテの顔の前に突撃槍の武装錬金が落ちて来て、ソニアはバルキリースカートを使って上手く着地する。

「大丈夫ですか？」

ブルブル　ガタガタ

「ハイ」

「地下にあった培養器は全部で２０、昨夜斃したホムンクルスが１６体、さっき弾き飛ばした不埒な本体を加えて、残る敵はホムンクルス３体と蝶々覆面の創造主」

首の傷に絆創膏を貼りながらそう言うソニアをハヤテが見ている。

「３体は恐らく創造主の護衛、手強いですよ」

「はい、でも勝たないと！」

「そうです、武装錬金は奴等を殲滅させるために造られました、決して負けません、必ず斃す！」

「斃すだけでなく、もうこれ以上一人の犠牲も出しません、それが

彼等に勝つコトだと思います！僕、もう一回お墓に手を合わせてきます」

そう言うとハヤテは自作の墓の方に向かって行き、ソニアがその背中を見ている。

（難しいコトを簡単に言ってくれますね…ですが）

「待って下さい、私も一緒に行きます」

「さっきの凄かったねー、いったい何だったんだろうあれ？」

「うーんペットボトルロケット？」

「ンなコトより急ごうぜ早く！」

「かな？」

「ハヤテめ！抜け駆けは許さん！紹介しろ！！」

「でもホント？ハヤ太君があんなトコロで女の人と」

モゾモゾ

オバケ工場に向かっていたワタル達と泉の足元にソニアが弾いたホムンクルスの本体が蠢いている。

ホムンクルスの正体（後書き）

途中に出てきた突撃槍の名前の候補は気にしないで下さい

ホムンクルス・寄生

「ハヤテさん」

「何ですかソニアさん？」

ハヤテとソニアが手を合わせながら話している。

「貴方は力を得た」

「ハイ」

「決意も出来た」

「ハイ」

「だがそれだけでは犠牲者を出さないと言うには足りません」

（これ以上犠牲者を出さないと言うのなら、貴方は武装錬金を自在に使いこなせる様になる必要がある！）

「いた、いたー、おーいハヤ太君！」

「「！」」

そんなハヤテとソニアの下に泉と一樹達が来る。

「ココに来るコトを話したんですか？」

「いや、全く」

「まぁいいです適当にあしらって私は去ります」

「こんなトコでいったい何を「あーっ！！ホントだ、ハヤ太君にカノジョー！」

ワタルの声を遮って泉が声を上げる。

「え゛」

「ハーヤテェェ！！」

「おめでとう」

「なんかおごれよ」

「ねぇいつの間に？いつの間に？」

「ええ゛？」

「カノジョ？え゛え゛え゛！？」

それを聞いたソニアが

「そおですか…私はハヤテさんのカノジョ…か」

そう言うと…

「「「「「申し訳ありませんでした」」」」」

ハヤテを含めた5人が一斉にソニアに土下座をする。

「じゃあハヤテとはいったい？」

一樹がそう聞くと。

ハヤテとソニアはアイコンタクトをかわし

ガシィ！！

「「姉弟」」

肩を組んでそう言う。

「ええ！知らない！私知らないよ！？」

当然ハヤテの妹である泉は混乱してしまうが、ソニアに抱きつく。

「お姉ちゃん？でも名字が違うからお義姉ちゃん？」

≪ええぃ鬱陶しいです、なにかいい口実はないですか？≫

≪えーとあと思いつくのは師匠（せんせい）とか強敵（とも）とか≫

泉に抱き着かれたソニアはハヤテとアイコンタクトで会話する。

「こんなトコで立ち話もなんだし、茶でも行かないか？」

ワタルがハヤテ達にそう提案する

「あ、そうだね」
「いや私は！？」
断ろうとしたソニアだったが
「わたりました、行きましょう」
「ソニアさん？」
急に顔色を変え、東宮達についていく。
「みんな移動ー♪」
東宮達三人と泉を後ろでソニアがハヤテに言う。
「厄介なコトになりました、弾くのではなく斬り裂くべきでした」
先を歩く泉の髪にはホムンクルスの本体がくっついていた。
「もしもしギルバートいる？」
「創造主の仰せの通り、近くで待機してマース」
上空では大鷲のホムンクルスに乗った創造主が誰かに電話をしていた。
「ワカリマシタ、ソイツらに追い打ちをかければいいデスネ」

「ただし、深追いは無用だよ」

創造主と話しているギルバートと呼ばれた男は巨大な蛙の姿をしたホムンクルスで、腹に人の顔があり、長い舌で持った携帯で話している。

「じゃあ、ここは一つ、子供達(ぶんしん)を使いマス」

ギルバートの背中にあるイボを突き破り、小型の蛙が出て来る。

ゲコゲコ

「私が仕留めます」

「僕も手伝います」

「ダメです、貴方は手を出さないで下さい」

ソニアとハヤテは前を歩く泉に付いたホムンクルスの本体に注意を払いながら相談をしている。

「どこ行こっか？」

「んーそうだねー」

「事態は誰にも気づかれずに完了しなければなりません、失敗すれば彼らを危険に巻き込むコトになりますあの本体が一度脳に侵入したら最後、もう打つ手はありません、取り憑かれた者は精神を殺され、肉体を奪われ、人喰いの化物となって暴れ出します」

ソニアが更に続ける。

「貴方の武装錬金はまだ出来ませんし、攻撃は力任せの大技のみ、貴方はまだ武装錬金を自在に使いこなせてはいません」

（私のバルキリースカートは俊敏にして正確、四人の標的に四本のアーム、誰が狙われようと必ずフォローできる！）

ピク

（動く！）

シュ！！

（動いた！！）

ソニアが無音無作動で武装錬金を発動させ、四人を守ろうとするがホムンクルスの本体はソニアに向かってくる。

「！」

（私？）

（ソニアさん）

「武装」

ここでハヤテの脳裏に先程のソニアの言葉が浮かぶ。

『事態は誰にも気づかれずに完了しなければなりません、失敗すれば彼らを危険に巻き込む』

「くそぅ！！」

ドン！

一樹達が振り返ると

「あれ？ハヤ太君？」

「エスケープか」

「ハーヤテェェ！」

「ホント、あの人何者なんだろう」

「うん…でもなんか」

（私、あの人の声最近どこかで聞いた覚えが）

ハヤテとソニアが消えていた。

「うおぁぁぁ！！」

ハヤテはソニアを抱いて、斜面を転がり落ちる。

ゴッ

「痛い！」

ゴッ

「痛い！」

ゴッ

「痛い！」

転がり落ちるハヤテの顔や頭には拳以上の大きさの石が何度も当たる。

デン！

「痛そう！！」

さらにハヤテの進行方向の先にはハヤテの身長程の大きな岩があった。

「けど…ッ！」

ハヤテは岩に向かって行きながら、ソニアを守る為、更に抱きしめる。

ドガッ！！

「ハッ」

ハヤテが目を覚ます。

「やっと目が覚めましたか、もうとっくに陽は暮れましたよ」
ハヤテは着ていた学ランを枕にして寝かされており、ソニアは近くの折れた木に腰かけていた。
がばっ
「ケガは！？」
ハヤテが起き上がりソニアのそう聞く。
「全身打撲」
ズキズキ
ハヤテの顔が痛みで歪む
「貴方がですが、私は大丈夫です貴方のおかげでケガはありません」
「…ホムンクルスは？」
「大丈夫です」
ソニアは着ていたセーラー服をまくり上げ、腹を見せる。
「貴方のおかげで脳への侵入は免れました」
そう言ったソニアの脇腹にはホムンクルスの本体が侵入しており、それを小型の蛙のホムンクルスが覗いていた。

「ゴメンナサイ…」

ハヤテがソニアに謝る。

「何故謝るんですか？貴方に全く落度はありません」

「それでもゴメンナサイ」

「謝らないで下さい、貴方はむしろよくやりました、奇生されたのが妹や友人だったら、それこそ取り返しのつかないコトになってました、それは貴方でも同様です何より貴方に二度も命の危機を強いるのは私が御免です」

ソニアがセーラー服を戻して立ち上がる。

「ともかくこれでこの厄介な胎児（ガキ）が頭を昇ってくるまでに片をつけなくてはならなくなりました」

「助かる…！」

がばっ

「その見込みがなければ貴方が目を覚ます前に自分で自分で始末をつけています」

ソニアが説明を始める。

「本体は胴から脳に達するまでこの距離ならおそらく一週間、それまで立ちふさがる三体のホムンクルスを斃し、唯一人本体を“解毒”出来る蝶々覆面の創造主を捕らえる、間に合わなければ私はホム

ンクルスになります、その時は貴方が私を殺すんです、そういう事情なんで」

ソニアは核鉄を構え、そのソニアの後ろには三対の目が光っている。

「呑気に構えている余裕はありません！こちらから行きますよ！武装」

「ぐっ！」

（コイツ邪魔を）

ソニアが武装錬金を発動させようとするが、脇腹に激痛が走る。

そうしていると、舌にそれぞれドリルや鉄球や鎌の様なものがついた小ガエルが現れる。

バキキキ！

三体の小ガエルが一気に貫かれ、貫いたのはハヤテの突撃槍の武装錬金だった。

「痛みますか？ソニアさん、けど一週間ガマンして下さい」

「ハヤテさん、今無音無作動で錬金発動を…」

ハヤテが出来なかったはずの無音無作動で錬金発動したことに驚く。

（一週間でこの突撃槍を必ず使いこなして“蝶々覆面の創造主”を捕まえる！！）

ハヤテが突撃槍を掲げ、そう決意する。

VSギルバート　前編

「おーい、泉さん！」

「ハヤ太君！」

寄宿舎に帰ったハヤテは先に帰っていた泉を呼びとめる。

「どうしたの？さっきは急にいなくなちゃって」

「それはさておき！一つ頼みがあります！」

「なぁに？」

「泉さんの制服を貸して下さい！」

その言葉に泉とその横に居た泉の友人の二人が固まるが

「ＯＫ♪」

「「ええ！！」」

泉が親指を立てて快諾したことに驚く泉の友人。

「……それでどうして必死にこの部屋に戻ってきたんですか？」

まるでホムンクルスに追われていた時のように必死に部屋に駆けこんで来たハヤテにソニアが問いかける。

「なんだかその後泉さんの部屋に連れ込まれて、お友達と三人がかりで僕がセーラー服を着せられそうになって……」

「…別に制服でなくてもいいんです、怪しまれずに校内を行動するだけですから貴方の体操着で十分です！」

「そうか！ジャージなら男女共通だから問題ナシですね！」

ソニアにそう言われてハヤテが手を叩く。

１日目

「蝶々覆面の創造主は貴方の学校の生徒です、腕章のラインが緑でしたから学年は一つ上の三年生、身体的特徴は身長１８５～１９０ｃｍ、肌の色は褐色、髪の色は黒、姿勢が良いといったところです、それらしき男を見つけたら確認しますから私に知らせて下さい」

「確認するっていっても、素顔は分からないんじゃないですか？」

「目を見ればわかります、ドブ川が腐った様な目の色です」

―昼休み―

「うーん、なかなか見つかりませんね」

「数は１２０人程度にしぼられているんです、三日もあれば必ず発見できます」

ハヤテとハヤテのジャージを着たソニアは木に寄りかかりながら昼食を取っている。

「ふぁ…」

「寝不足ですか？突撃槍の名前なら考えておきますから夜はしっかり寝て下さい」

「いや、そういう訳ではなくて」

「今だから話ますけど、核鉄を心臓代わりにするのは実はかなり荒療治なんです」

ブパッ！

ハヤテが飲んでいたジュースを噴きだす。

「そうなんですか！！」

「だから決して無理しないで下さい、少しでも痛みや不調を感じたら私に知らせてください」

「ソニアさんは大丈夫ですか？昨夜からずっとおなか押えていますけど…」

ハヤテがソニアを心配しながら見る。

「ああ、少々重みがあるからつい押さえているだけです、痛みは全くありません、私の心配はいいです、ホラ、始業ですよ」

「いけない、えーと次は」

ハヤテは頭の中に時間割を思い浮かべる……次の授業は体育。

「あ」

「どうしました？遅れますよ」

ハヤテは次の授業に着るジャージがない事に気付く。

ガラッ

「泉さん、次の体育で使うジャージが無いんです、貸して下さい！」

ハヤテが泉のクラスに飛び込みながらそう言う。

「ＯＫ♪」

泉がさし出したのは女子生徒用の体操着（ブルマ）だった。

「ええっと、ジャージは無いんですか？」

ハヤテが恐る恐るそう言うが…

「大丈夫、ハヤ太君なら似合うよ☆」

泉は笑顔を浮かべながらハヤテに詰め寄る。

「きゃーー！！」

この後、ハヤテが何を着て体育を受けたかは作者は知りません。

「武装錬金！！」

夜で人気のない神社でハヤテが武装錬金を発動させる。

（ソニアさんはしっかり寝ろっていってましたけど、一週間でこの突撃槍を使いこなせる様になって、蝶々覆面の創造主を捕まえる！）

「頑張らないと」

（でもどうすればいいからよくわからないから、まず昨夜と同じ素振り千回から）

バッ　バッ　バッ

「1　2　3」

ハヤテは素振りを始める。

2日目
3日目
4日目

（……いない）

（いない、いない！どこにもいない！？）

蝶々覆面の創造主が見つからない事に焦るソニアとハヤテ。

「ハハ…そうか、そろそろあせり始めたか」

小ガエルがそんな二人の様子をカメラで撮影していた。

「ゲホゲホ」

「創造主！」

ベットに寝ていた男が咳き込む。

「大丈夫ですか？」

マキナが薬を取り出し、創造主に渡す。

「ハハ…自分の体調も考えずに君の背中に乗ったのがまずかったかな」

（小ガエルが得た情報はギルバートを通じて全て筒抜け…こちらから手を出さずともこのまま学校を休んでいるだけであと三日で女戦士はジ・エンド）

「ところでギルバート」

「ハイ？」

「残るもう一人男の方は誰なのか本当に判別はつかないのかい？」

創造主が小ガエルを操るギルバートに問いかける。

「スイマセーン、小ガエルあんまり目ェ良くないノデ」

「「……」」

ギルバートと創造主が見つめ合う。

「まぁいい、情勢は確実に有利…よし！体調が回復し次第、これまでの研究の集大成、最後の実験を始めよう」

ベロ…

ギルバートが人知れず舌舐めずりをする。

（創造主は影も形も見当たらず、訓練はやっぱりといかさっぱり手応えなし、むしろ筋肉痛と寝不足でマイナス効果）

ハヤテが痛む体でそう思ってるとソニアが話しかけて来る。

「ハヤテさん、学校での捜索は今日で終わりにしましょう、どうも何か裏をかかれている気がしてなりません」

「わかりました」

「あからさまにショボくれないで下さい、別に無駄に時間を費やした訳でもないんですよ、私達を警戒してか四日前を境に連中が動いた気配がありません、つまりこの四日間、犠牲者は一人も出ていません、これは歴とした私達の行動の成果です」

ソニアは成果が出なかった事により落ち込んでいるハヤテを慰める。

「明日以降のコトは今夜中に考えておきます、貴方はなんだか疲れがたまっている様ですから、ゆっくり休んで下さい」

「はい、また明日！明日こそ創造主を捕らえましょう！」

ハヤテはソニアと別れる。

ズキッ

ソニアは激痛に脂汗を浮かべ脇腹を押える。

「…やっぱりソニアさんは強いなぁ、さすが戦士って名乗ってるだけはある、僕ももっともっと頑張らなきゃ、そうだ！武装錬金を使いこなすにはどうすればいいかさりげなくアドバイスを聞いてみよう！」

クルッ　ダッ

ハヤテがソニアの下に引き返す。

ハヤテがソニアの方に引き返す。

「ソ…！」

角を曲がったハヤテが見たのは苦しそうに電柱に寄りかかるソニアの姿だった。

「ハァハァ…ハァ…ハァ…大丈夫、まだ時間はある…」

それを見たハヤテは…

「僕…」

（もっと頑張らなきゃ！）

そう決意する。

「！」

苦しそうにしているソニアの横を胡散臭そうな外国人の男、ギルバートが横切る。

ベロンチョ

グッ

ハヤテは胸を押さえながらギルバートを睨む。

「よく分かりましたね、けど邪魔しないでクダサイ、ワタシあの人を食べたくてもう我慢できませン」

ハヤテの脳裏にはここ数日間の事が思い浮かぶ。

「アンナ美味しそうな人放っておけなんて創造主は分かってないんデスヨ、ホントは今が食べ頃！死体になったらマズいですシ、ホムンクルスになったら食べれすらしません、アナタの気持ちもわかりますケド、余計な手間はかけたくないデス、うーんドウシマショウ？そうだこうしまショウ！探しているデショ？ドウデスカ？」

ギルバートのその提案にハヤテは

「わかりました」

パン！

ハヤテがギルバートの手を弾く。

「邪魔をします！ソニアさんは食べさせません！貴方を斃して創造主のコトも吐かせます！！」

「アナタ…このワタシに勝てると思ってるんデスカ？自分が強いとでも思ってマスカ？」

弾かれた手を撫でながらギルバートがハヤテにそう言う。

「未熟は百も承知です、でも今はソニアさんを戦わせたくありません！ソニアさんの他にこの街で貴方達と戦えるのは僕だけです！！」

（…ついでにこの人も始末して核鉄を二個お土産にすれば創造主も勝手を許してくれるカモ？というよりなんだかこの人生意気デス！）

「わかりました、相手してあげマス、ただしここは人目につくので場所はワタシが選ばせて貰いマス、何人の邪魔も助けも入らない場所で一対一デス」

VSギルバート　前編（後書き）

今回のハヤテが体操服を借り行くところは漫画ではまひろは涙目になって逃げてアニメでは逆に笑顔でＯＫと言い、隣にいた友達二人に連れていかれます、この小説は基本漫画に忠実な予定ですが、ここはアニメ寄りにしました。

VSギルバート　後篇

ハヤテとギルバートは人気のない川原に来ていた。

「武装錬金！！」

「掛け声デスカ、いいですね、ワタシもホムンクルスチェーンジ！」

ハヤテが武装錬金を発動し、ギルバートは巨大な蛙を模したホムンクルスの姿になった。

「どうデスカ、夜の川原って真っ暗デショ、町外れでひと気も全くない、ここならまず邪魔も助けも入らナイ」

「「心おきなく一対一だ」」

ゴク…

（考えてみれば僕…一対一で戦うの初めてだ、こうやって真っ向から敵と向かい合うのも…）

ニタ

「アラアラ、足が震えてますよ」

「！」

バシィッ

ハヤテが震えている足を叩いて止めようとする。

「ＨＡＨＡＨＡ恐がってる恐がってるアナタは情けない戦士デスネ」

「戦士見習い！言ったでしょう未熟は承知！でも今貴方達と戦えるのはこの街では僕だけ！だから戦うんです！！」

ハヤテのその言葉を聞いたギルバートは

「フーン、決意デスネ、わかってませんね、決意一つ上乗せしたくらいで勝てる程、人間とホムンクルスの力の差は小さくないんです、よく見て下サイ」

姿勢を下げ、背中のイボをハヤテに見せる。

ゲコ　ゲコ　ゲコ

ギルバートの背中のイボから小ガエルが飛び出す。

「！？」

小ガエルがハヤテに向かい飛んでくる。

ドガガガッ

「く……っそう！一対一のはずでしょ！」

ハヤテが血を流しながらそう言うが

「一対一デスヨ、小ガエルだってワタシの身体の一部、その証拠二」

ドッ

「私の意のままに動かせる」

後ろから襲ってきた小ガエル達の舌がハヤテの左胸を貫く。

「この小ガエルこそがワタシの力の要、あっけないですケド、ハイお終いデス」

ドサッ

ハヤテが倒れる。

「ハヤテさんいますか？入りますよ、すいませんさっき体操着を返し忘れました、明日の授業で使うと言ってたでしょう、ちゃんと洗って…」

ソニアがハヤテの部屋に入ってくる。

パチ

ソニアが部屋の電気をつける。

（いない…）

「ン？」

ソニアが何かを見つける。

（特訓メニュー！！
ランニング　５？
素振り　１０００回
イメ・トレ☆
？
…成程、今度はこれが寝不足の原因）

「可愛いコトをする…」

ソニアは思わず微笑むが、すぐに真剣な顔になる。

（けどわかっていない…このやり方では武装錬金は使いこなせない）

ソニアがそんな事を思っているとハヤテの部屋の扉が開く。

「おーいハヤテいるかぁ！いい物ゲットしたぞ！お前の好きなお姉さん系の…ってソニアさん！？」

「ン？」

部屋に成人用の本を持って飛び込んで来た東宮が固まる。

「そうですか。ハヤテさんはこういうのがスキなんですか、と言うかなんです、貴方エロスは程々にしておいた方がいいですよ」

「あれ？」

「ソニアさんなんでココに？」

たまたま通りかかったワタルと一樹のソニアに気付く。

「ハヤテさんどこか知りませんか？」

「いいえ、なんだかここ二、三日夕食の後に抜け出しているみたいだけど」

「でも今日はまだ帰って来てねぇな、確か夕食の時いなかったし」

ダッ

ソニアが走り出す。

「！」

「ソニアさん？」

突然走り出したソニアを不思議そうに見ていた東宮と一樹だったが

バッ！

「ちょっとまった！」

「ここ二階！」

二階にあるハヤテの部屋の窓から飛び降りるソニアに驚く二人。

「飛び降りたああ」

ガタタ

一樹とワタルが窓に駆け寄る。

「あれ…いない……」

「……ホントにあの人いったい何者なんだろうな」

そう呟いたワタルに東宮が言う。

「案外お前といい勝負かもな」

（あの人はまた一人でなにか無茶を）

ソニアがハヤテを探して走り出す。

「お宝ゲットォ、これでひとまず創造主に言い分が立つ」

ギルバートは倒れているハヤテの横にあった突撃槍の武装錬金を舌で持ち上げる。

「あれ？でもコレどうやって核鉄ってヤツに戻すんデショウ？」

そう言いながら先に進むギルバート。

ピク…

ハヤテの手が僅かに動く。

（あれ？僕生きてる…あー…そうか心臓（こっち）は今空っぽだっけ、だから穴が開いても全然平気…じゃない、やっぱり“死ぬ”ってメチャクチャ痛い……！こんなにも痛いのでもソニアさんはやっぱり我慢し

て隠そうとするんでしょうね…泉さんは泣くんでしょうね…ワタル君、東宮君、一樹君はどうでしょう…やだな）

ギシ…

ギルバートが抵抗を感じ、振り向く。

『こんなに痛いコト、僕、誰にも味あわせたくない』

「勝手に持っていかないでくださいよ」

ハヤテが立ち上がり、武装錬金の飾り布を掴む。

「…成程、アナタはもっと恐くてもっと痛い思いをしたいんデスネ」

「痛いのも恐いのも我慢します、これはソニアさんがくれた新しい命…この新しい命に宿るのは自分を守る為の力じゃない、貴方達からみんなの命を守るための戦う力です！！」

バチィ！！

ハヤテの握っていた飾り布がエネルギー状になる。

「！？」

『武装錬金は…武装錬金は己の闘争本能を形に成したモノ、だから訓練という“練習”をいくら積んでも本当の力を使いこなすコトは出来ない、まず“実戦”の中で個々の武装錬金が持つその特性を感じ取って理解する、訓練はそれから…ハヤテさん、貴方はわかっていない！』

「わかった！！」

バチバチ

エネルギー化した飾り布を握りながらハヤテが叫ぶ。

ドウ

小ガエル達がハヤテに向かってくる。

「ハイハイわかりました！いいからもうアナタは死になサーイ！」

「うおおおおッ！！！」

ハヤテの飾り布のエネルギーで小ガエル達が焼き尽くされる。

「！？！」

（小ガエルが全…滅）

（わかった！武装錬金には現代科学では再現不可能な特性があるんだ！ソニアさんのバルキリースカートには俊敏正確に動く四本のロボットアーム、僕の突撃槍には戦う意志に呼応してエネルギー化するこの飾り布！これが僕の武装錬金の特性！！）

「さぁ！今度こそ正真正銘の一対一です！」

ハヤテがそう言うとギルバートは

「いやです！」

ギルバートは蛙の跳躍力で跳んで逃げる。

「よくもやってくれましたね、小ガエル一匹作るのに大量の栄養が要るんデスヨ！喰ってあげます！まずはあの女！！そこからどいつもこいつも喰って喰って喰いまくってあげマス！！」

「そんなコト！させてたまるかぁ！！」

突撃槍の飾り布が光を放つ。

「え〝っ？」

「見つけた！！そこだ！」

「！？消えた！？いないデス！？」

ギルバートがハヤテを見失う。

「約束です！創造主のコト全部」

ハヤテはギルバートより更に上に現れる。

「ヒィイッ！！！」

「吐いてもらいます！！！」

ゴッ！！

ハヤテがギルバートに突撃槍を振り下ろす。

貴方は少し強くなった

「アヒアヒィィィ！？」

ハヤテの攻撃によってギルバートは巨大な蛙を模したホムンクスの身体が砕け、小ガエルにギルバートの顔が付いた様な姿になる。

「ハァハァ」

「バカな、こんなバカなぁ」

ガッ！

ビクゥ

ギルバートはジタバタしながら逃げようとしたが、ハヤテが突撃槍の柄で地面で叩いた音を聞き、振り返る。

「ヒィィィ！？」

ギルバートの顔が恐怖に染まる。

「わ、わ、わ、わかりました、創造主のコト全部話しマス、あの人も食べません！もう人間は食べマセン！だから助けて！」

ギルバートが泣きながら脅える。

「嫌デス嫌デス、死にたくない、死にたくないデスーー」

（死ぬってやっぱりメチャクチャ痛い）

「ハァハァ…本当ですね？約束しますね？」

「！ホ、ホント！約束！ホントデス！」

「じゃあまず蝶々覆面の創造主…あの人は何処に」

「ああ、バカみたいに校舎を見張ってましたよねアナタ達、ツメが甘いですよ、学校の生徒が使う施設は何も校舎だけじゃないデショ」

ビシャッ

ギルバートの顔が血に染まる。

「ヒィィィ、ゴメンナサイゴメンナサイ、勿体ぶらずに言いマス」

ガッ　ドサッ

ギルバートが焦ってそう言っていると、地面に携帯電話が落ち、ハヤテが倒れる。

「ってアララ、アラァ、アラァァ、アラアアラアアラァ！！」

さっきまでは恐怖が浮かんでいたギルバートの顔が大きく変わる。

「驚かせて！コノ、コノ、この人を食べてパワー回復！いや、やっぱりあの人の方にしましょウカ」

ギルバートが嬉しそうに跳ね回っていると

ジャリ…

「ヒドイ格好、だがお前にはお似合いだな」

一人の女性が現れる。

「おー、キリカサン、丁度良かったちょっと手を貸して下サイ」

「手？ほら」

ズプ

キリカの指が薔薇の茨になり、ギルバートの額の章印などを貫く。

「ギャー！」

「お前の造反など創造主はとうにお見通しだ、我々にとって創造主の命令は絶対、逆らえない、気持ち悪いんだよオマエ」

ボシュゥゥ

ギルバートが消え、キリカは巨大な薔薇の茎の中に女性が入っている様な姿になる。

「創造主に逆らうモノは全て醜い、とっとと始末してこの核鉄とやらを創造主に」

ズ　ズズ

倒れているハヤテにキリカの茨が迫る。

ヴィルルルル　ヴィルルルル

「ンン？」

キリカが茨で器用に電話を取る。

「それ以上動くな、動けば即殺す」

ドウ

「！！」

ソニアが現れる。

「……動かなければ？」

「楽に殺してあげます」

ソニアが核鉄を掲げる。

「錬金の戦士の登場か、しかしよくココがわかったな」

「見くびらないで下さい、近辺の貴方達のエサ場なんて既に調べつくしてあります」

「武装　ぐっ！！」

ズキィン

武装錬金を発動させようとするとソニアの脇腹に激しい痛みが走る。

「知っているぞ、オマエが本体に寄生されてるコト、痛くて力も使えない、それでどうやって戦うつもりだ？無理しても、しなくても三日後オマエは私達の仲間になるんだから大人しくしていろ」

ソニアの目に力がこもる。

「武装錬金！！」

バチィッ

「ゴプ…仮に化物になるにしてもそれまでに一匹でも多く始末してあげます、なっても真っ先に蝶々覆面の創造主を始末してあげます、化物風情が錬金の戦士をナメるな！！」

ソニアは血を吐きながらもバルキリースカートを発動させる。

「……醜い、その言葉！その態度！その表情！創造主の邪魔をするヤツは許さん！！」

「黙れ人喰い！！」

ビシィ　バシィ

バリキリースカートの四本の可動肢にキリカの茨が巻きつきく。

「どうだ？これが創造主のくれた力！この百のイバラは虫一匹通さないぞ！！」

キリカが見た先にはソニアの足から外れたバルキリースカートしか無かった。

「！？」

ソニアがキリカもとに飛び込んで来る。

「忠告はしましたよ、動かなければ楽に殺してあげると！」

ドス

ソニアの二本の指がキリカの両目に刺さる。

「うぎゃああ」

ズヌプ

ソニアが指を抜き、

「脳漿をブチ撒けろ！！」

可動肢の一本を掴み、ブレードでキリカの頭部を切り裂く。

「！」

ハヤテが目を覚まし、自分の左胸を触る。

「……核鉄が戻ってる、前の様に傷もふさがって…」

「生存本能に働きかけ治癒能力を高める、核鉄に付属する力の一つです」

ビクッ

（ソニアさん？なんでココに）

いるはずの無いソニアの声に驚くハヤテ。

「だからといって、頼り過ぎるのは禁物です、元々ある本人の生命力を治癒力に強制変換しているだけですから、度を超えれば逆に命をすり減らす結果につながります」

「ソ…ソニアさん？」

「なんです？」

「あの…怒ってます…？」

ハヤテが恐る恐る尋ねるとソニアは

「いえ、別に」

口ではそう言うが表情や雰囲気ではそうではないと感じさせた。

（綾崎 ハヤテ死亡確定！！
享年１６歳
セーラー服とブルマが似合う男だったのだ☆）

「なんでですか！！！っていうかこれ絶対泉さんが言ってるでしょ

う！！」

「どうしたんですかハヤテさん？」

突然叫び出したハヤテをソニアが不思議そうに見ている。

「まぁいいです、言ったでしょ今後は私の指示に従って下さいと、何故…一人で戦ったんですか？」

シュルル

ソニアは自分のスカーフを外しながら言う。

「……」

そう聞かれたハヤテは苦しそうに電柱に寄りかかっていたソニアを思い出しながら言う。

「スイマセン、少し自惚れてました」

チャプ

（……ヘタなウソですね）

ソニアはスカーフを川の水につけながら思う。

（自惚れてるなら人に隠れて特訓なんてしないでしょう）

パシャッ

ソニアはスカーフを川から上げ、ハヤテの方に歩いて来る。
「まぁいいです…今日は見逃します、ですが今度勝手をしたらこうですから」
ギュウウウウ
「はい…」
「それと、もっと私を信頼して下さい、いいですね」
「はい、信頼します」
ソニアのその言葉にハヤテが笑顔で答える。
「そうだ！聞いて下さいソニアさ　痛！」
ズキッ
起き上ったハヤテの左胸に痛みが走る。
「しばらく横になっていて下さい、まだ傷の修復中です、動けば痛むし、発熱も酷くなりますよ」
「僕、つかみましたよ武装錬金の使い方！僕の突撃槍は闘う意志に反応してエネルギー化する飾り布が特性なんです！」
ハヤテは自分が掴んだ突撃槍の特性をソニアに話す。
「なんとかホムンクルスも一体倒せました」

「斃した？バラのホムンクルスに斃されたんじゃないんですか？」

「バラ？違いますよ、蛙です」

「じゃあ本当に……一人で一体斃したんですか？」

「はい、でもこのザマじゃあ…」

学ランを枕にして横になっているハヤテの額に絞ったスカーフを乗せながらソニアが言う。

「そうです、まだまだ貴方は未熟です」

（でも）

「もっともっと頑張らな…きゃ」

スゥ

ハヤテが目を閉じる。

「貴方は今日少し強くなった」

（明日からまた頑張るために今夜一晩はゆっくり休んで下さい……）

貴方は少し強くなった（後書き）

とりあえず一巻分投稿しました、次はいつ投稿できるか分かりませんができるだけ早く投稿したいです。

ロックオン

「うわあ？」

バン

「うわあ！？」

ホテルにハヤテの叫び声が響く。

「やっとお目覚めですか」

ハヤテが叫んでいるとソニアが入ってきた。

「うわあああん」

（ホテル＋パンツ一丁＋私服のソニアさん、僕に一体何があった？）

「昨夜貴方があのまま眠りに入ってしまったから、寄宿舎より近い私の宿に運んだけですが、それ以外に何があります」

何もありません。

「ビジネスホテルですか、へぇーー」

ハヤテが部屋を見渡す。

「この街に滞在している間の仮住まいです」

「へぇー、なんかちょっと意外です」

それを聞いたソニアがクスリと笑いなら言う。

「私が雲に住んで霞でも食んで生きているとでも思っていたんですか？」

ハヤテが思い浮かべていたのは…ソニアが川原で段ボールの中で体育座りをして涙目を浮かべているイメージだった。

「失礼です！」

（そういえば僕ソニアさんのコト何も知らないな）

「ソニアさんはどこの学校の何年生なんですか？」

ハヤテにソニアがそう聞くと。

「なんですか藪から棒に、学校には行ってません」

「え？」

「あの制服は一つ前の指令時に潜入した学校のものです、その後本隊に戻らずここに来たのでそのまま使ってるんです」

「本隊？」

「…錬金術の力を悪用する輩共に対処する一団、とだけ言っておきます、普通に学校に行ってるとすれば今年で高三になります」

「あ、やっぱり年上なんですね」
笑顔でそう言ったハヤテに向かい、ソニアが言う。
「年上だと嬉しいですか？」
「？」
ハヤテは何故そう聞かれたか分からなかったが、話を続ける。
「でも…じゃあなんで学校に行かないでソニアさんは戦士になったんですか？」
「全てのホムンクルスが憎いから」
ゾク
ハッ
そう言ったソニアの雰囲気に飲まれるハヤテと咄嗟に後ろを向くソニア。
「くだらない詮索より今は創造主の捜索でしょう、今日は土曜日だから一日中かけますよ」
「あ、はい」
（迂闊に触れちゃいけないトコでしたね、スイマセン…ソニアさんは人喰いの化物と戦って皆を守ってくれている、今はそれで十分です！）

「よし行きましょう！」

5日目

『昨日までの四日間、学校での探索では見つかりませんでした、だが裏を返せばそれは四日連続で学校を休んでいる者が怪しいという証拠、そしてハヤテさんが倒した敵から聞きだした言葉「ツメが甘いですよ、学校の生徒が使う施設は何も校舎だけじゃないデショ」校舎以外の学校施設と言えばただ一つ、寄宿舎！学校を四日連続で休んだ三年の寄宿生、その人を探して下さい！』

ハヤテとソニアは寄宿舎の前に来ていた。

「灯台もと暗し！！」

ドン！

そうハヤテが無駄に力を入れて言う。

「そういうコトは言わないでいいです」

「四日連続で休んでるヤツ？」

「ウチのクラスにはいないなぁ」

「いないよォそんなヒト」

寄宿舎に居た三年生に聞いて回るがそんな生徒の情報は得られなかった。

「あれーー？」

「…少々気になったんですが、今日は何気に人が少なくないですか？」

「あ、それは土曜日だからです、週末は半分以上の生徒が帰宅するんです」

「そうなんですか、では聞き込むだけでは十分な成果は得難いですね、わかりました、貴方はこのまま寄宿舎を探して下さい、私は学校に忍び込んで出席簿などをチェックしてきます」

「了解しました」

ソニアがハヤテと別れようすると、ハヤテがソニアに話しかける。

「あ、でも」

「なんです？」

「この間のメモ、あれだけじゃ正直イマイチ特徴伝わりにくいんですが」

「そうですか、じゃあ似顔絵でも描いてみますか？」

「それです！」

「けれど、正直私に画才はありませんよ」

ソニアがそう言うとハヤテは

「大丈夫！何を隠そう僕は似顔絵の達人です！！」

そう叫びスケッチブックなどを取り出す。

「…貴方今何も考えていないで喋ってないですか？」

ソニアが疑わしそうにハヤテを見る。

「いいですから、ささ」

「まったく」

「まずは髪型」

「黒髪…」

そうしてソニアから特徴を聞きながらハヤテが似顔絵を描く。

「出来上がり！」

出来上がったハヤテの似顔絵を見たソニア。

（上手い！けどなんか似てません！！）

ハヤテの書いた似顔絵は何故かジ〇ジョの奇妙な冒険のようなタッチだった。

「じゃあ小一時間で戻りますから大人しくしていて下さい」

「三年生はほとんど聞いたから次は二年か」

ハヤテは次は二年生に話を聞きに行く。

「この人を探しています！どこかで見たコトはないですか！？」

ハヤテは東宮、ワタル、一樹、泉に似顔絵を見せるが

「どーせ僕はエロスだちくしょう！」

「…って言うかお前、昨夜何処に泊った？」

「それよりソニアさんって一体何者なの？」

「うわ、変態さんがいる！」

「東宮君どうしたんですか？」

「それはな」

ワタルがハヤテに耳打ちし、昨夜東宮がハヤテの部屋に何を持ってきたか知ってしまう。

「！！」

そしてソニアの

『年上だと嬉しいですか？』

という言葉を思い出す。

「エロス…」

「年上…」

東宮とハヤテがそう呟きながら頭を抱える。

「ま、ヒマだし俺達も探してやるか」

「そうだね」

「年上がどうしたのハヤ太君？」

「えっ……とナニナニ身長１８５～１９０ｃｍ、肌の色は褐色、髪の色は黒、姿勢が良い」

ハヤテと歩いている泉が蝶々覆面の特徴を読み上げている。

「こっちの方は案外フツーだね、これならすぐにみつかるんじゃない？」

「こっちはそんなにダメですか？一筆入魂の力作なんですけどね」

ハヤテが自分に似顔絵を当てながら泉に聞く。

「あ、ホラあそこ」

「緑の腕章だから三年生、ちょっと聞いてみよーよ」

泉が水飲み場に居る三年生の男子に話しかける。

「すみませーん」

ちょっと聞きたいコトが

「あ、少し待って、先にコレを飲ませてくらないか」

「！」

話しかけられた三年の前には大量の飲み薬があった。

「うわ…全部飲んでますよ」

「そんなに飲んで大丈夫なんですか」

泉のその問いかけに答える。

「大丈夫じゃないよ、けど飲まないと体が持たないからね」

「体弱いんですか？」

「まぁね、それより僕に何か用？」

「あ、そうでした、三年の男子、寄宿生で昨日までの四日間学校を休んでいる人を探してるんですけど」

「今のところ誰に聞いてもそんな人いないって答えが」

「！！」

ハヤテの声に三年男子が反応する。

「そうか…キミが」

「え？」

「じゃなくて、そうかそんなヤツはいないか、だとすればその彼は透明な存在なんだろうね」

「透明？」

『目に映っていても風景の一部としてしか認識されない…どの教室にも必ず一人はいる居ても居なくても誰も何も気にとめないクラスメート、そんなカンジの存在』

「可哀想だね、彼について他になにかわかっているコトはないのかい？」

「ちょっとした特徴とあとはこの似顔絵ぐらいです」

ハヤテが紙を渡す。

（なんだかスゴイことになってる！！）

「一筆入魂！」

その似顔絵を見た三年生の顔色が少し悪くなる。

「やっぱりいないですよねこんな人、いたらただの変態さんだし」

「そうですね、たしかに奇抜な格好ですよね」

「そうだよねー、ハヤ太君」

二人のそんな会話を聞いていた三年生は

「そうでもないさ、このマスクは蝶々を模しているようだが、蝶は素晴らしいんだよ、誰も見向きもしない醜いイモ虫から誰もが目を止めずにはいられない美しい姿に変身！！パピヨンはね、華麗なる“変身の象徴”なんだよ」

『目を見ればわかる、ドブ川が腐った様な目の色です、身長１８５～１９０ｃｍ、肌の色は褐色、髪の色は黒、姿勢が良い』

三年生の目を見たハヤテが言う。

「泉さん」

「なに？」

「そろそろ昼食にしましょうか」

「え？うん」

「ワタル君達を集めて先に玄関で待っていて下さい」

「あ、うん」

泉が一人先にワタル達の下に向かう。

「僕、去年一年間ここで暮らしてましたけど、先輩のカオに見覚えがないです…」

「言っただろう、彼は透明な存在…いつも風景の一部でしかないそして…ゴプァ」

三年生が突然血を吐く。

「！！」

ヴィルルル

ハヤテが電話を取る。

「見つけましたよハヤテさん！寄宿生、三年生で四日間休んだ者は確かにいます！３－Ｃ出席番号８番、冴木ヒムロ１９歳！それが創造主蝶々覆面です！！」

ヒムロが懐から蝶々の覆面を取り出す。

「そして！自分の力では命すら保てない最弱のイモ虫、けど彼は見つけてしまった、偉大なる錬金術の力を！！華麗なる変身の方法を！」

（この人が蝶々覆面…ここで捕まればこれ以上の犠牲者は出ない、ソニアさんも助かる！この人を捕まえる！！）

もう一つの新しい命

「三分で戻ります！待っていて下さい」

ブッ

ソニアが電話を切る。

（ホムンクルスの創造主蝶々覆面、どれ程の力を持っているかわからないけどここで必ず捕らえる！）

「武装」

ハヤテが武装錬金を発動させようとする。

「ストップ！ハイそこまで」

ヒムロが何かを取り出す。

「それ…」

「そ、ホムンクルスの本体の解毒剤、実験中の事故対策に作った自分用、だからこれ一個だけの希少品、最後の実験は今さっき済ませたからもう不要、けどこれがないとキミの仲間の女は二日後にはホムンクルスになってしまうだろ、だからキミの核鉄と交換というコトでどうかな？」

ヒムロがそう提案してくる。

「ホムンクルスと並ぶもう一つの錬金術の結晶、話には聞いていたが先日目のあたりにして次の研究対象にしたくなった、どうする？要らないならコレはこのまま下水に流すけど後でやっぱり欲しいと言っても精製には時間がかかるから手遅れは確実だよ？」

ヒムロがカプセル薬の様なものを顔の前に持ってきて言う。

「さ、
ど
う
す
る
？」

「……」

グッ

「だめです！やっぱりコレは渡せない！」

「まぁそう言うと思った、武器を手放せば自分が一気に不利になるのは明白、僕だって自分の命が一番惜しい」

「違う！核鉄を手放したら僕は死んでしまうから、薬を手に入れても結局ソニアさんには渡せません！」

「どういうことだい？」

ヒムロがハヤテの核鉄を渡したら死ぬと言う言葉の意味を聞く。

「…僕は貴方が作ったホムンクルスに心臓を貫かれて一度殺されたんだ、けどソニアさんがくれた核鉄を心臓の代用品にするコトで生き返る事が出来ました、だから僕の胸に埋まっているこの核鉄は新しい命を兼ねているんです」

ニタァ

「うわあ！？」

その話を聞いたヒムロが笑う。

「命…新しい命…！なんと核鉄にはそんな力があるのか！キミはそんな簡単に新しい命を手に入れたのか！ゴパァ」

ヒムロがまた血を吐く。

（この人ヤバイ！）

「よこせ！その新しい命を僕によこせ！」

ヒムロがハヤテに向かってくる。

「貴方が造ったホムンクルスのおかげで何人もの命が失われているんですよ！それなのになんで貴方に新しい命を…勝手に言うなッ！！」

ドゴッ

「あ！」

「ゴフ」

ハヤテの拳がクリーンヒットする。

（しまった思わず……）

倒れるヒムロの手から薬が零れる。

パシィ

横から現れた手が薬を掴む。

「ソニアさん！」

「？」

「それ、ホムンクルスの解毒剤です」

ハヤテが嬉しそうに言うが

「残念、偽物（フェイク）です、虫くだしじゃあるまいし本物は直接本体にブチ込む注射タイプです」

「やられた！！」

ハヤテが悔しそうに言う。

「蝶々覆面を捕らえたましたか、よくやりました」

「はい、でもなんかちょっと変です、ボスで元凶なのにかなり貧弱

です」

「当然です、この人は私の様に戦う訓練など積んでいません、ホムンクルスの製造を可能にした以外は全くただの人間、この人の個人情報を学校でさらってきました、冴木ヒムロ、明治から続く貿易業を営む資産家の長男、入学試験での成績は五教科五百点満点、ＩＱ２３０、普通にいけば学校創設以来の天才になるハズだったんです」

「だった？」

「入学してすぐ原因不明の病気を発症しました、治療法もなし、免疫力が徐々に低下してやがて確実に死に至ります」

ハヤテとソニアはヒムロの話を聞くためにヒムロの部屋に来ました。

「入退院の繰り返しで二回の留年、以降は自分の部屋でひきこもりの生活、この人を知る生徒はほとんどおらず、教師達もサジを投げた状態」

「ね、言った通り彼は可哀想だろう？」

「一つ問います、貴方はどこで錬金術を…ホムンクルスの精製法を手に入れたんですか？」

「西洋貿易商を始めたひいひいじいちゃんの半世紀に渡る研究日誌、それを実家の蔵で見つけて三年かけて完成させた、んー我ながらスゴイ…」

「…先輩はなんでホムンクルスなんて化物を造ったんです？」

「それについてはもうわかってます、アレを見て推測が確信に変わりました」

ソニアが示したのはホムンクルスの培養器だった。

「今までの２０体は全て試作品……本体はこの２１体目、この人はコレを使って自分自身をホムンクルス化する気なんです！！」

『ホムンクルスは通常の力ではコナゴナに破壊しても徐々にしかし必ず再生する、錬金術以外の力を全く受け付けないその強靭な肉体はこの世で最も不老不死に近い代物、創造主、蝶々覆面の目的は病んだ人間の体を捨て、不老不死のホムンクルスの体を手に入れるコト！』

「でも！確かホムンクルス本体にとりつかれたら人間の方は死んじゃうんじゃあ」

ハヤテがソニアに聞く。

「ええ、精神を殺され肉体を奪われる、ですが一つだけ例外のホムンクルスがあります」

「そう、それが僕の目指した究極の“人間型ホムンクルス”！この２１体目は僕の細胞を基盤（ベース）に使ったいわば分身！分身との合体ならば精神は同化して殺されずにそのまま残り、そして肉体はこの世でもっとも不老不死に近くなる！動物型や植物型は単なる化物だが、この人間型ホムンクルスは超人だ！！」

「けど、ホムンクルスだから人を喰べるんでしょでしょ？これまで何人もの命を犠牲にしてこれからもっと大勢の命も犠牲にして貴方はそこまで生きたいんですか！」

「生きたいね、さっき言ったろ誰だって自分の命が一番だって、僕は自分が生きるためならどんな手段でも使う、キミはどうなんだい？一度死んだんだろ？生きたくありませんって言うならじゃあ死んだままでいろよ、自分はのうのうと生き返って、僕にこのまま死ねと？病という運命を受け入れ死んでしまえと？」

そう言ってくるヒムロにハヤテが気圧されていると

「死んでしまえ」

「「！」」

ソニアがそう言い放つ。

「どのみち貴方は超人になどなれません！あれは今すぐ破壊する！」

ソニアが核鉄を持って培養器を指さす。

「！やめろ！！あと二日で完成なんだ！僕はそれを使ってイモ虫から蝶になるんだ！それは僕の新しい命なんだ！！」

ヒムロが焦っていると

「「！！！」」

ドッ

「この空圧…」

「これは確か」

ビリビリビリビリ

『最後の一体、鷲型のホムンクルス！！』

ドカァ

上空から部屋を突き破って巨大な爪が現れる。

「！」

バシィ

培養器が壊れ、宙に舞ったフラスコをヒムロがキャッチする。

「…大丈夫か創造主、錬金の戦士…よくも我が創造主を！」

マキナがハヤテとソニアを睨む。

「形勢逆転…だね！女！キミは化物になって死ね！僕は超人になって生きる！！」

ヒムロがそう言うと

「化物も超人もどっちも僕が阻んで止める！！」

ハヤテがそう言う。

VSマキナ（前編）

「女！キミは化物になって死ね！僕は超人になって生きる！！」

「化物も超人もどっちも僕が阻んで止める！！」

ハヤテ達は瓦礫と化したヒムロの部屋で睨みあっている。

「…阻止する…そうかつまり、キミも僕にこのまま死んでしまえと」

ヒムロがそう言うとハヤテはが答える。

「違います！死ねなんて軽々しく人に言えません！今まで犠牲にした人達にちゃんと償って、それから命が終わる最期まで生きて下さい！」

「創造主、ここはオレに任せて早く逃げろ」

「口論しているヒマはありませんよハヤテさん、すぐに人が来ます」

四人が睨みあっていると

「なんだ！いったい何が起きた！！」

「警察に連絡はしたか？」

「爆発か」

「俺見た！隕石だ！」

「各学年、寮監は点呼を」

突然ヒムロの部屋が崩れたことに生徒達が集まってくる。

キョロキョロ

「アレいねェ！！ハヤテがいねェぞ！」

辺りを見渡したワタルが泉に言う。

「え…」

「よし！ソニアさんは蝶々覆面を捕まえて下さい！僕はマキナさんを喰い止めます！」

「何？」

「突進だけなら僕の突撃槍の方が速いはず、この距離なら一瞬！」

それを聞いたマキナが言う。

「このオレに“速さ”に挑むか…」

（…確かに上空なら話は別ですが、障害が多いこの場ならヤツが変形を完了する前に！）

「よし、行きますよ！」

「武装」

ガッ！！

「「！？！」」

ハヤテとソニアがホムンクルス化したマキナの腕に掴まれる。

「このオレを見くびったが最期…」

そんなハヤテとソニアにヒムロが言う。

「これまでは全てこの本体…つまり、僕の新しい命を造るための、人間型のホムンクルスになるための動物実験の産物、だがこのオオワシのホムンクルス、マキナは出来が違う」

キィィィィ

「「「「「「！？」」」」」」

下で騒いでいた人々が音に気付く。

ドウ！！

ヒムロの部屋から何かが飛び出す。

ポカァン

下に居た人々がポカンとしている中、泉は

（…なんだろう、なんかイヤな胸騒ぎがする……）

そんな不安を感じていた。

「フン…」

ヒムロはマキナがハヤテとソニアを連れて飛んで行った方向を見る。

『今まで犠牲にした人達にちゃんと償って、それから命が終わる最期まで生きて下さい！』

「綺麗事ばかり言う偽善者、一番嫌いな性格（タイプ）だ」

ヒムロが瓦礫と化した部屋を見渡す。

「また…居場所が失くなった、あと二日僕はどこへ行けばいい……」

ゴォォ

「「！！！！！！！」」

（息が…出来な…い、このまま…じゃ…！！）

「ソニアさんッ！！」

ハヤテがソニアに呼びかける。

「わかっています！！」

「「武装錬金！！」」

二人が武装錬金を発動させ、マキナの腕から逃れる。

「！」

ズキィッ

「！！ソニアさん！」

ソニアの脇腹に激痛が走り、ハヤテもそれに気付き、自分の下を落ちているソニアに手を伸ばす。

「大…丈夫です！手を！！」

ガシィ

二人の手が合わさり、二人は上空から落下する。

「着地します！バルキリースカートで人二人分の重量を支えるのは難しいがやってみます！」

「待って下さい！ここは任せて下さい！！」

（突撃槍の武装錬金の特性はこの飾り布！僕の戦う意志に呼応してエネルギーになって発動する！！）

「弾けろ！僕の武装錬金！！！」

ドォン！！

ハヤテとソニアが着地し、ソニアはハヤテを見ながら思う。
（…布のエネルギーで落下の衝撃を相殺した…やはりこの武装錬金は強力！それに徐々にだがハヤテさんも確実に使いこなせる様になって来ている！）
「危なかったぁ」
「いい力を持っている…さすが錬金の戦士」
「「！！」」
上空から腕の部分を爪と翼に変えたマキナが現れる。
ビッ
「！！」
マキナの爪がハヤテの頬に傷つける。
「体の一部だけをホムンクルス化！なるほど…これなら変形も攻撃もより速くなる、確かに“出来が違う”」
（こんなホムンクルスは初めてだ！）
ソニアが今まで戦ってきたホムンクルスとは違うマキナに警戒する。
「心が震える！お前達が相手ならオレも力を存分に発揮出来そうだ」
ハヤテとソニア、そしてマキナが対峙する。

「ホムンクルス最後の一体！」
「この人を倒せばあとはパピヨン一人です」
「創造主に害なす者は全て斃す！！」
「「「いくぞ！！」」」
ドン
マキナの頭上にソニアが現れる。
「その翼もらった！！」
「知ってるぞ」
ガキィ
マキナが翼でバルキリースカートの刃を受け止める。
ギチィ
（固い？いや違うこれは）
「いかな速い刃でも刃筋が立たない限り切り裂くは不可能　ヌン！！」
ガキィ

ソニアが迫りくるマキナの爪をバルキリースカートでなんとか受け止める。

ビキィッ

「避けて下さいソニアさん！！エネルギー全・開！！」

ハヤテが突撃槍を構える。

「くらえ！ジュースティングフラッシャー！！」

ドッ！！

ハヤテがマキナに突っ込むが

「！！」

（外した！違う！これは）

「知ってるぞ、いかなる鋭い穂先でも先端を僅かにずらせば回避は可能」

ドッ

「なんの！もう一回！！」

バッ

「斬り裂け！！」

バキィ

二人がマキナの両翼に弾かれ、ソニアとハヤテの額から血が流れる。

「お前達の風速はもう掴んだ、知ってるぞ、これは確か“見切り”というモノ」

「「っこの！！！」」

「！」

二人の攻撃をマキナが腕で受け止める、ソニアが攻撃した方は腕に切り傷が入り、ハヤテの方は凹む。

「体勢を立て直します！一旦退きます！」

「了解！！」

「逃がさない！！」

一旦退こうとする。

「ジュースティングスラッシャー！」

ハヤテが飾り布をエネルギーに変える。

「ムッ！」

マキナが眩んだ目を開けると、二人はもう居なかった。

「…地力もあるし機転も効く、なかなかどうして…」

マキナは腕を見る。

「だが、男の方はまだまだ未熟、それに女の方も前に上空で見せた動きに比べると、今日は少し鈍い、勝てる！いや勝つ！！オレに力をくれた創造主のために！！」

マキナが飛び立つ。

「ハァハァ」

「バルキリースカート、待機（ウェイト）モード」

ソニアの可動肢が縮んでコンパクトになる。

「わ、便利！さすがバルキリースカートですね」

「何がさすがよくわかりませんが、貴方も経験を積めば色々と出来る様になります、それよりスラッシャーだのフラッシャーだのアレは何ですか？」

ソニアがハヤテに聞く。

「ああ、あれですか？スペシャル技です！少しはサマになるかなぁと思って考えました」

「聞いていて恥ずかしんですが、叫ばなきゃ出せないですか、イチイチ敵に知らせては不利ですよ？」

「別に、けれど叫んだ方がなんか威力が強くなるような気がして」
その言葉を聞いたソニアの頭には
『臓物(ハラワタ)をブチ撒けろ！！』
そう叫ぶ自分の姿が浮かぶ。
「…成程、合点がいきました」
「でしょ」
「とにかく血を拭いて下さい、流血で笑顔はちょっと恐いです」
ソニアがハヤテにハンカチを渡す。
「ありがとうございます、ソニアさん大丈夫ですか？」
「そうですね、右肩が少々」
ソニアが首を触る。
「！」
「ソニアさん？」
ハヤテがソニアに声をかける。
「いえ、大丈夫です、大したコトはありません」

「無理しちゃ駄目ですよ」

「貴方も言うようになりましたね、私を誰だと思っているんです？」

「僕より強い錬金の戦士、でも言いますよ、こういうコトはちゃんと言います」

ハヤテがハンカチで血を拭いながら言う。

「そうですか、わかりました気をつけましょう、ですが今は戦いの時です、あのワシ型、明らかに他のホムンクルスと一線を画しています、あの翼を使った防御は自然に身につく技術（ワザ）じゃない、元来の自分の力に溺れず“戦い”に対して学習し鍛練を積んだ成果です」

「あのワシ男のホムンクルスの戦士ってコトですか？」

「勘違いしないで下さい、通常より手練た化物だというコトです、化物である以上退治する方法はあります！」

ドウ

「見つけたぞ！！」

ハヤテの前にマキナが現れる。

「来たッ！」

「一人！二手に別れたか！！」

（いいですかハヤテさん、ワシ型の翼を使った防御は確かに絶妙、

だが絶対の代物ではないです！二人同時で攻撃した時ヤツが翼でなく爪を使ったのを見てわかる様に翼の防御は連続した攻防には対応しきれない、狙うは一つ、高速連続攻撃！！一人目が囮になってヤツの翼の防御を誘い出した後、間髪を入れず二人目が渾身の一撃を叩き込む！）

木の陰に隠れたソニアがハヤテとマキナの戦いを見ている。

『その囮は僕がやります！僕の突撃槍ならスラッシャー＋フラッシャーの合わせ技でギリギリまでソニアさんの姿を隠すコトが出来るはず！！』

ドッ

「いきます！！！」

「……」

VSマキナ（後篇）

「ハヤテの奴いたか？」

「ううんこっちには」

「学校にもいかなかった！」

ワタル達がハヤテを探している。

「どうも僕達に会う前にソニアさんと一緒にいたみたいだ」

「何！じゃあまた！！」

「まぁあの人が現れてからハヤテの奴頻繁にいなくなるからね、でも、ひと安心かな」

「くそォ今夜こそとっちめてやる！」

（またイヤな胸騒ぎ…なんかこのままハヤ太君にもソニアさんにも、もう会えなくなるような気が…）

三人はあまり心配していない様だが、泉は得体の知れない不安を感じていた。

ゴッ！！

マキナがハヤテに突っ込んで来る。

（（狙いは一つ！高速連続攻撃！！））

「いきます！！」

（一人目が囮になって翼の防御を誘い出し）

ハヤテもマキナに突っ込んで行く。

（ヤツが体勢を崩したところを二人目が渾身の一撃を叩き込む！）

（光に隠れてついて来て！ソニアさん！！）

ゴォ！！

（バルキリースカート起動！！）

ハヤテの突撃槍から出た光に紛れてソニアが突っ込む。

（…山吹色（サンライトイエロー）の綺麗な光、太陽光に似ている……）

「うぉぉぉ！」

ドドドドド

ピク！

マキナが何かに反応する。

「違う」

「？」

「さっきの突撃と風が違うぞ、わずかに別の風が混じっている」

「！！」

（この人目だけじゃなく翼で風を読んで…）

「読めたぞ！光の後ろに女の方！右か左の爪で一人ずつ片づけてやる！！」

ガガガ

「失敗です！ソニアさん逃げて下さい！」

ハヤテが止まってソニアにも注意を呼び掛ける。

「止まらないで下さいハヤテさん」

バッ

ソニアがハヤテの肩に手を置きそのまま突っ込む。

「！！」

ソニアがマキナの上を取る。

「二度も上空を取られるとは不覚！！だが敗けないッ！！」

「臓物をブチ撒けろォ！！」

ザク！

ソニアは可動肢が全て折れ、マキナの爪により深い傷を負い、マキナの身体には四本のブレードが刺さっている。

「「「！！！」」」

「ソニアさん！！」

「ハ…ヤテさん」

ソニアが落下しながら言う。

「今です！貫けェ！！」

「うぉぉぉッ！！ジュースティングスラシャー！！！」

ズガァ

マキナの左腕が吹き飛ぶ。

「ソニアさん」

ハヤテがソニアに駆け寄る。

「なんであんな…」

「手の内を読まれたから…切り換えました」

「でも！」

「！」

ハヤテが自分の手に付いたソニアの血を見る。

「それに…おそらくこれがまともに戦える最後」

首から手を退けたソニアの首にはホムンクルスの本体の尾が見えている。

「とうとう脊髄まで昇ってきました…体の動きが徐々に鈍くなってきている、外すワケにはいきません、そう思って仕掛けたんですが…」

バン！

マキナが二人の下に現れる。

「危険な女だ…お前の執念はホムンクルスになっても必ず創造主に仇を成す、今、この場で確実に仕留める！」

「あと一歩必要な様ですね…」

立ち上がろうとするソニアとハヤテが押さえる。

「後は任せて下さい、ソニアさんは休んでいて下さい、ここから先は」

グッ

ハヤテが突撃槍を握る。

バリッ

「僕が一人で戦います」

ソニアが驚いたような顔をする。

「この人を倒してパピヨンさんを捕らえて、２１番目の本体を壊して解毒剤を手に入れます！」

そんなハヤテにマキナは言う。

「強がっても無駄だ、知っているぞ、囮は通常戦力に劣るモノが担う役目…未熟者のお前は後回しでいい、まずは女の方が先決、退け！」

「退きません！」

「退け！！」

ドシュウ

ハヤテにマキナの右腕の爪が刺さる。

「退いて下さいハヤテさん！今の貴方ではまだソイツには敵いません！」

ソニアがそう言うが、ハヤテは。

「退きません！ソニアさんの命令でも、絶対に退きません！！」

ガッ！！

ハヤテの突撃槍がマキナの左腕の辺りを更に砕く。

「うおおッ！！」

ドガッ

ハヤテの突撃槍の一撃をマキナが右腕で受け止める。

ゴッ　ドガァ　ドガァ

ハヤテが連続でマキナに攻撃する。

「！」

グラ

マキナがよろめく。

「スキあり！ジュースティングスラッシャー！！」

バサッ　ガキィン

ハヤテの一撃が翼で逸らされる。

「駄目だ！また外された！」

「何度試しても無駄だ、オレはこの翼で風を読む、目で見るより耳で聞くより正確に風は全てを教えてくれる！！いかなる状況、状態だろうとこの翼の防御を仕損じるコトはない！！」

ゴッ

マキナがハヤテに肘打ちをし、ハヤテが倒れる。

（しかし、少々風が変わった、相変わらず未熟、強風や暴風には程遠い、だが力強い息吹を感じる）

ハヤテが立ち上がる。

チラ…

（原因は…）

マキナがソニアを見る。

（このホムンクルス、隻腕片翼になっても防御は依然鉄壁…防御を崩して決定打を入れる、やはりハヤテさん一人ではこの連携は）

ソニアは落ちていたバルキリースカートのブレードを掴もうとするが

「ソニアさんは手を出さないで下さい」

ハヤテがそう言って止める。

ダッ！！

「いきます！！」

ハヤテがマキナに突っ込む。

ガキィ　ビリビリビリビリビリビリ

マキナが爪先でハヤテの突撃槍の刃を止める。

「あの女、あの女はそれ程重要か？力量差からくる上下か？」

「？」

「それともお前達はつがいか？」

「！？」

マキナの問いかけにハヤテが戸惑う。

「戦闘中ですよハヤテさん、敵の会話に乗らないで下さい！！」

「でも聞かれて答えないのは、なんというか失礼！？」

「失礼でいいです！」

「ソニアさんは僕の命の恩人ですよ」

ハヤテが答える。

「！」

「一度死んだ僕に新しい命と力をくれたんです、今その人の命がかかってるんです！負けてたまるか！！」

ハヤテの言葉を聞いたマキナが言う。

「なんだ、オレと同じか」

「え？」

「創造主は私の命の恩人だ」

『この体を得る以前、オレは野生の大鷲だった、最大の猛禽類にして空の王者、その中でもオレは最強の一羽』

まだ大鷲だった頃のマキナが空を飛んでいる。

『だが』

ドン

マキナの体から血が噴き出す。

『誤射か密猟か、オレは射たれ堕ちた、そして死んだ』

「あっけない」

ヒムロがそう呟く。

「ま、命なんてこんなモノ、天然記念物だろうが死んだらハイそれ

まで、しかし蝶々を採りに来てこんなレア素材が手に入るとは、君も僕も運がいい、喜ぶといいよ、蘇らせてあげるよ」

二ィ…

『そしてオレは蘇った』

「創造主はオレの命の恩人、一度死んだオレに新しい命をくれた、今その命がかかってるんだ！邪魔立ては許さない！！」

（道理で…通常の“すり込み”では考えにくい、高い忠誠心はそういう理由か、戦闘への意識の高さは野生の血の成せる業）

「そうですか、僕と貴方は同じ、でもお互いの恩人が全く違う！」

ハヤテが続ける。

「ソニアさんは僕のことを案じて核鉄をくれた、泉さんの心配もしてくれたし犠牲者の墓にも手を合わせてくれました、パピヨン―ヒムロさんは貴方達を実験材料としか見ていない、他人の命は全部ないがしろにして死ぬ恐怖から免れて自分が生きるコトしか考えていない」

グッ

ハヤテとマキナは拮抗している。

「ヒムロさんのやっているコトは間違っています！そんな間違いのせいでソニアさんを死なせたくない！だから「下らない！！」

バゴォン

マキナがハヤテを弾き飛ばす。

ドガァ

「が！！」

「ハヤテさん！」

ハヤテが木に叩きつけられる。

「“死を恐れる”のは生物の本能、野生に生きた私には十分解る、創造主の行為は間違いじゃない！」

マキナが更にハヤテに言う。

「お前だって正直このまま死にたくないないだろう…創造主に二度と関わらないと誓うなら、降参するなら、このまま生かして見逃してやってもいい、死を恐れ、死から逃げてもそれは恥じゃない」

その言葉を聞いたハヤテは。

「でも僕が逃げれば代わりに死に捕まる人がいる」

「「！」」

「退いてたまるか、負けてたまるか！ソニアさんを死なせてたまるか！！」

ハヤテが突撃槍に飾り布を巻きつけ立ち上がる。

「！！」

（槍の穂先に布を巻いている！あの状態なら布の状態なら布のエネルギーを突進力だけでなく破壊そのものの力にも使える！！けれど）

「貴方の言う通り死ぬのは恐い…僕は一度死んだからわかるしパピヨン―ヒムロさんも死に直面しているからわかると思う、だけど僕もヒムロさんも人間なんです」

突撃槍の飾り布がエネルギー状になっていく。

「だから死んでもやっちゃいけないコトと死んでもやらなきゃいけないコトがあるです！！」

ババババ

「！！」

ハヤテの体がエネルギーによって光る。

（あれでは自分自身にもダメージが！！）

「やめて下さいハヤテさん！」

「エネルギー全・開！！ジュースティングクラッシャー！！！」

ピシィ　ピシィ　ピシィ　ピキィ

ハヤテの一撃でマキナの身体が砕ける。

「…息吹が本当の風に成った…か…勝手と承知して…る…けど一つだけ頼み…が…ある…創造主…を」

シュウウウウウ…

「殺しませんよ、最初からそんな気はありません、止めるだけです」

「…それを聞いて…安心して死ねる…安心…して死ね…る……か…そん…な死があるとは…知らなかっ…た……な…」

消えてしまったマキナにハヤテが手を合わせる。

「ナムアミダブツ、アーメン」

（死を恐れるのは生物の本能と言いつつ命を懸けてパピヨンの為に戦う…最期まで特異なホムンクルスでしたがハヤテさんにはいい経験になった、わずか一週間でここまで武装錬金を使える様になるのは本当に稀なこと）

最期までヒムロに忠誠をつくしたマキナ、わずか一週間でマキナを倒せるまでになったハヤテに感心するソニア。

「五日目が終わる、残りあと一日……明日の夜１２がタイムリミット」

「大丈夫ですかソニアさん？日が暮れる前に山を」

ハヤテがソニアにそう言うが

「その体では無理です今夜はここで一晩過ごします、それと一つ話があります、心して聞いて下さい」

ミッド・ナイトラン2

『貴方に一つ話があります』

ハヤテとソニアが寝そべっりながら話をしている。

「ＧＰＳで調べました、どうやら私達は随分遠くへ来てしまったようです、今夜いっぱい安静にして核鉄の治癒力を体を癒して明朝から山を降りて交通機関を最短で乗り継いでも練馬区にたどり着くのは夕刻過ぎになります…」

「ちょっとした日帰り旅行並ですね、で、着いたらすぐヒムロさんを探して」

「居場所はだいたい見当がついています、ホムンクルスを全て失った今、彼はもう非力な高校生に過ぎません、体力もなければ仲間もいない、結局最期にすがりつく場所と言えば肉親の元、恐らく実家でしょう」

「よし！タイムリミットは明日の夜１２時、十分間に合う！」

「そうです、だから後は全て貴方に任せて私はここに残ります」

その言葉にハヤテがソニアに詰め寄る。

「何言ってるんですか？話が通ってないですよ！時間的に間に合うじゃないですか！」

ハヤテがソニアの肩を掴んで揺する。

「コラ、揺らないで下さい！お互いの体力がヤバイんです！ちょっとやめ…！」

「ハァハァハァ」

「ハァハァハァ」

ハヤテの体力が尽きて揺れが止まり、二人共息を切らす。

「間に合うのは貴方一人の話、コイツのおかげで下半身がマヒして動かないんです」

そう言ってソニアが首を見せる。

「私は山を降りれません」

「でもそれじゃあ解毒剤を手に入れても戻ってくる時間が…」

「いいんです、もう戻ってくる必要はありません、明朝貴方の姿が見えなくなった後、私は自分で自分自身の始末をつけます」

「何諦めてるんですか！死んじゃだめです！まだ何か手段があるハズ！」

「だから揺すらないでください！死にますよ二人共、本当にやめ…！」

それを聞いたハヤテが再度ソニアに詰め寄る。

「ハァハァハァ」

「ハァハァハァ」

再度二人が力尽きる。

「そうだ！“本隊”」

ハヤテが立ち上がる。

「え？」

「今朝言っていましたよね、本隊があるって！そこに緊急要請を頼めば！」

フルフル

ハヤテがそう言うがソニアは首を振る。

「無駄です、日本にいる戦士は確か今、全て任務に就いて活動しています、残念ですが緊急要請をかけても明日の夜１２時には到底間に合いません、定期連絡は入れていますから本隊から何らかの行動はあると思いますが全ては事態が収束してから…その後、そう遠くないうちにハヤテさん、貴方の前に次の戦士が姿を現します、その者に私の代わりに全てを報告したらこの一週間の出来事は全て記憶の奥底へしまって下さい」

ソニアは核鉄のあるハヤテの左胸を見る。

「核鉄は本来貴重で希少なモノですが、所在の把握と悪用の阻止がなされれば本隊として一応の形がつきます、貴方が武装錬金を二度と使わないと約束すれば本隊も貴方を拘束したりはしないでしょう、

妹と友達と楽しく過ごす方が貴方には似合っています、今度こそ日常に帰りなさい」

ソニアの言葉を聞いたハヤテは決意した目をして言う。

「わかりました、帰ります」

「それでいいです」

「今すぐ」

「は？」

ハヤテをその声にソニアが驚く。

「コラァーッ！！」

ダダダダダダダダ

誰もいない山にソニアの怒声が響く。

「人が動けないのをいいコトに勝手な真似しないで下さい！」

ハヤテがソニアをお姫様抱っこして夜の山を駆け抜ける。

「夜明けを待たずに今から山を降りれば！二人でも夕方までにはなんとか！」

「こんな無茶したら体力を待たずに倒れますよ！」

「大丈夫です、ソニアさん軽いですから！」

「バカ！そういう問題じゃありません」

「降ろして下さい！」

「イヤです！」

「降ろしなさい！」

「ダメです！」

「降ろせ！」

「イヤん！」

二人はそんなやり取りしながら山を駆け抜ける。

「もう誰一人犠牲を出さないって前に言いました！ソニアさんだってそのうち一人なんです！間に合う！絶対に間に合わせてみせます！」

（見た目より…ずっと大きな肩）

ハヤテに抱っこされたソニアがそう思う。

〜〜では続いてのニュース

昨日、東京都練馬区潮見高等学校寄宿舎で起きた、原因不明の突風による被害は――〜〜

「ハヤテ帰ってこないね」

「ここの所よく消えたりしてたけどさすがに丸一日っていうのは…
…」

ニュースを見ていた一樹と東宮が帰ってこないハヤテのことを話し
ている。

「そうだな、昨夜の点呼は声色使ってゴマかしてやったからいいも
のの」

ワタルが何気なしにそう言うが

「そんなコトしてたの！？」

「ホントにオマエは何者だ！？」

トン　トン

「オッス、オラハヤテ」

一樹と東宮は知らなかった事実に驚き、ワタルは実際にハヤテの声
色を使ってみせる。

「とにかくだ、あのソニアさんが姿を現してからハヤテの奇行にタ
ーボがかかった！」

「もしたして何かヤバイコトに巻き込まれてる？」

「もしそうだったら…」

（ハヤ太君……）

三人と泉がハヤテの心配をしていると

ザッ…

ハヤテが寄宿舎に帰って来た。

「ハヤ太君！」

「「「ハヤテ」」」

ダダダ！

四人がハヤテに駆け寄る。

「「「「！」」」」

「ただいまぁ…」

「……」

四人が見たのは汗だくでソニアをお姫様抱っこしたハヤテと真っ赤な顔をしたソニアだった。

「「「ラブラブでボロボロ！？」」」

ワタルを除いた三人がハヤテとソニアを指さして言う。

「頼むからホントに降ろして下さい…」

ソニアが力の無い声で言う。

「いったいどうしたの？まさか昨日の突風で吹き飛ばされたの？」

泉がそう聞くとハヤテはいかにも今思いついたという感じで言う。

「そう！それです！で、ソニアさんはギックリ腰起こして動けなくなってここまで運んで来たんです」

「ずっと？」

「はい、ずっと」

ハヤテは満員電車も大通りも繁華街もずっとソニアをお姫様抱っこしっぱなしだったのだ。

どよーん

「もういい、もういいから死なせて…」

ハヤテに降ろしてもらったソニアは恥ずかしさから落ち込んでしまう。

「弱音厳禁！諦めるにはまだ早いです！」

その様子を見ていた泉も後に続く。

「そうだよソニアさん、ギックリ腰はちゃんと治るケガだよ！」

（ズレてる…さすがハヤテさんの妹）

そんな泉の言動にソニアがそう思う。

「それじゃ僕行って来ますから！」

「え？」

そう言ってどこかに行こうとするハヤテ。

グッ…

「ちょっと待って、またどこかに行くの？」

泉がハヤテのシャツを掴む。

「ええ、ちょっとやり残しの用事があるんです」

「でもボロボロだよ、今夜は休んで明日とかに「いや今夜じゃなきゃダメなんです」

ハヤテがそう言うと、ハヤテのシャツを掴んでいた泉の手が離れる。

ガシィッ

ハヤテが泉の両肩を掴む。

「そこで泉さん！僕が留守している間ソニアさんをよろしく頼みます！」

「え？」

「頼みます！！すぐに帰ってきますから！」

ハヤテのその言葉を聞いた泉は

「わかった任せて！何を隠そう私は看護の達人なのだッ！！」

（ハヤテさんだ、ここに女ハヤテさんがいる…）

看護師の被る看護帽をかぶった泉がそう言い、ソニアはそんな泉に頭を抱える。

「待て、ハヤテ」

ハヤテを東宮が呼び止める。

「お前僕達に隠し事してないか？何かヤバイコトに巻き込まれてるんじゃないか？」

「「……」」

東宮のその言葉にハヤテは

「…スイマセン、東宮君の言う通り、今ちょっと大変なコトになっています、でも全部解決します！だから大丈夫です！！」

グッ

そう言って拳を差しだす。

「事情が話せなくても必要なら力は貸そうと思っていたけど、心配無用でノープロブレムか」

東宮がハヤテの拳に東宮が拳を合わせる。

「じゃあとっとと解決して来い！」

「ソニアさんは泉に任せるのだ」

「気を付けてね」

「点呼は声色でまたごまかしておくぜ」

四人が思い思いの言葉でハヤテを見送る。

ザッ！！

「よおし！もうひとっ走り！！」

ハヤテが出発しよとするが

「待って下さいハヤテさん、これを持っていって下さい、貴方の携帯は昨夜の戦いで使いモノになりません」

そう言って携帯を差しだす。

「あ、うわ本当だ！」

ハヤテの携帯は砕けており、もう使えないだろう。

「まず状況を逐一報告するように心掛けて下さい、それとこれも」

ソニアが自分の核鉄を差しだす。

「二倍とまではいきませんが一つより二つの方が治癒能力はより強まります、もしもの事態の場合、一つを武装錬金一つを治癒にあてがえば戦闘中でも体への負担は軽減できるはずです」

核鉄を渡したソニアが続ける。

「ハヤテさん、やっぱり貴方は戦いより妹と友達と一緒にいる方が似合っています、だから私のためだけなどではなく、貴方自身ためにも絶対ここに帰って来て下さい！」

「了解です、必ず！」

ハヤテはそう力強く言い、ヒムロの実家に向かう。

「着いた！ここがヒムロさんの実家！」

ハヤテがヒムロの実家にたどり着く。

「タイムリミット―１２時まであと五時間…新しい命が手に入るまであと五時間！！」

ヒムロが２１番目のホムンクルスの本体の入ったフラスコを眺めながらそう言っている。

黒く　熱く　甘く

「え？」

「だから知らんと言っている、ヒムロの行方など今更知る気も起こらん」

ヒムロの父親にヒムロの行方を尋ねたハヤテだったが知らないと言われる。

「あいつにはこの冴木家の家督を継がせるコトを目的とし、幼い頃からありとあらゆる英才教育を施し、そしてその甲斐もあってこの家の礎を築いた曾々祖父に比肩すると周囲から言われるまでに育て上がった、それが今じゃ高校を２回も留年する、今年で２０歳の引き込もり」

そう言ってヒムロの父は部下二人を連れ、家の中に引き返す。

「おまけに今度は昨日の突風事件の後行方不明、警察から事情を聞かれるは学校と警察から連絡やら聴取やらで面倒迷惑この上ない」

そんなヒムロの父にハヤテは

「…あなたヒムロさんのお父さんですよね？ヒムロさん病気で苦しんでましたよ」

そう言うが、ヒムロの父は振り向き言う。

「それがどうした？目的も果たせないならただの役立たずだ、あい

つを見つけたら伝えておけ、冴木の家督は次郎が継ぐコトに決まったお前はもう要らんとな」

ピシャッ！

扉が閉じられる。

「ハイもしもーし、あ、ハヤ太君、うんソニアさん？大丈夫！ナイチンゲールの誓いにかけて、看護婦・泉がちゃあんと面倒見るから！！」

「あの衣装自前？」

「もしかしてただの制服好き？」

「ちなみに今は看護婦じゃなくて看護師が正解だしな」

「……」

ナース服を着た泉がハヤテと電話で話しており、その後ろでは泉に突っ込みを入れる一樹、東宮、ワタルとまるで志々〇真実の様に包帯をぐるぐる巻きにしたソニアがいる。

「パピヨンは自宅に帰っていない？父親が嘘をついているとは考えられないんですか？」

「もー！！ツッコミ禁止！注射するよ」

顔や手の包帯を取ったソニアが電話を代わりハヤテと話しており、泉は後ろの三人を追いかけている。

「はい、それになんて言うかこう…僕がヒムロさんだったとしても絶対帰りません、ここはヒムロさんの居場所じゃありません」

ハヤテが先程のヒムロの様子を思い出しながら言う。

「そうですか、じゃあ他に考えられる場所と言えば」

「はい、あとは以前入院していた病院か例のオバケ工場のどちらか」

「いえ、ヤツのことその予測は多分読んでいます、それに追い詰められた人間の心理は出来るだけ頼れるモノの元へ逃げ込もうとします、病院も工場ももう頼れない、今パピヨンが唯一頼れるのは…」

「了解、探してみます！」

ダッ

「あ、コラ走らないで下さい！無理すると今度こそ倒れますよ」

「大丈夫です！まだ！」

「まだ！？」

それを聞いたハヤテは冴木の屋敷の中に走って入っていき、それをヒムロの良く似た人影が見ている。

コチ　コチ

「あと三時間と半…」

ホムンクルスの本体の培養器の前に座っているヒムロが言う。

グゥゥゥ

ヒムロの腹が鳴る。

「……そう言えば昨日から何も食べてないな、超人(ホムンクルス)になったらまず何か食べよう、何がいいかな？」

バン！

ヒムロの居た蔵にハヤテが入ってくる。

「ハァハァ…見つけましたよヒムロさん」

「君は…綾崎君」

ついに二人が対峙する。

「ヒムロさん！！」

「綾崎君！！」

ブシュウ！　ゴパァ！　ドシャッ！！

電話越しに音を聞いていたソニアにハヤテの頭から血が噴き出す音、ヒムロが血を吐く音、そして二人が倒れる音が届く。

「どうしたんですハヤテさん？なんですか今の豪快な音は？」

ピク　ピク　ピク

ソニアが電話越しにそう叫ぶが、二人は答えない。

「興奮して倒れた？だから言わんコトないですよ！」

電話をしているソニアの様子を見た泉が呟く。

「ソニアさん、意外に元気」

「見つけましたよソニアさん、ソニアさんの読み通りヒムロさんの唯一の拠り所はひいひひいおじいさんの遺した錬金術の研究、その研究の記録を発見した蔵こそがヒムロさんに残された最後の避難所！」

立ち上がったハヤテがソニアにそう報告する。

「君が生きているというコトはマキナは敗れたのか」

「ええ…最期まで貴方のコトを案じていましたよ」

ハヤテがそう言うがヒムロは

「それがどうしたんだい？目的を果たせないならただの役立たずだよ」

そう言い放つ。

「解毒剤とホムンクルスの本体をこっちに渡して下さい」

ハヤテがそう言うとヒムロは

「解毒剤はあげるよ、でもこっちは駄目だ」

片膝を着いたヒムロがホムンクルスの本体の培養器を守る様に手を広げる。

「このまま貴方をホムンクルスにするわけにはいきません、もうこれ以上犠牲者を出さないって決めたんです」

ハヤテが首を振りながらヒムロに言う。

「話しても無駄ですハヤテさん、その人にはもう届く言葉はありません、早くホムンクルス本体を奪い取るんです」

電話から聞こえて来たソニアの声にハヤテが言う。

「わかりましたソニアさん、でも最後に一つだけ…ヒムロさん貴方、例えホムンクルスと人間どっちに転んだとしても、今のままだったら死んでもずっと独りぼっちですよ」

ハヤテがヒムロに言う。

「墓があっても花も線香もない」

（それがどうした？）

「手を合わせる人もいない」

（死んだ後のコトなど関係ない！）

「誰の記憶にも残らない、もし貴方が犠牲者に償うと誓うなら僕が…」

「それ…がど……」

（それがどうした偽善者……）

ヒムロはハヤテの一言一言に言い返そうとするが上手く声が出ない。

「それがどうしたんだい？死んだ後のコトなんて関係ない」

「「！？」」

突如後ろから声が聞こえる。

ガシィッ　ガッ

「「！！」」

黒服の男に後ろから羽交い絞めされるハヤテとヒムロ、そして声の主はヒムロに瓜二つだった

「君、偽善者だね」

（ヒムロさん分身！？）

「何の用だい次郎」

「なんだい、君まだ父さん伝えてないのかい」

次郎がハヤテに向かってそう言うと、次はヒムロに向かって言う。

「家督の件、今度正式に僕が継ぐコトになったよ」

（弟！）

「そんなコトかい、僕にはもうどうでもいいコトでね」

「へぇー、そう？でもねコトなんだよ」

ズイッ

次郎がヒムロに顔を近づける。

「冴木の家に生まれたのに一年遅かっただけで後はずっーと兄さんの予備扱い、普通の教育！普通の学校！普通の生活！兄さんが発病するまで僕がずっと地を這うイモ虫だったんだ！」

次郎がホムンクルス本体の培養フラスコを見る。

「だからさ、今更病気が治っちゃ困るんだよね」

「「！」」

次郎がホムンクルス本体の入った密閉フラスコを摘む。

「話はイマイチわからなかったけど、これがあれば兄さんが助かるんだろ？」

次郎の言葉にヒムロが慌てる。

「やめろ！それは完成までまだ少し時間が…」

パリィィィィ

密閉フラスコが割れる。

「うわぁぁぁぁ」

「あはははは」

ヒムロの叫びと次郎の笑い声が響き渡る。

「兄さんなんて誰も必要としていないんだよ！死んでよ！早く死んでよ！」

「な」

ハヤテを捕らえている黒服がハヤテに言う。

「この一族狂ってて面白いだろ？」

ギリ

ハヤテが歯を食いしばって二人を見ていると

「来いッ！！！」

「！？」

「お前は僕の分身だ！誰よりも何よりも生きたいハズだ！！だったら来い！今こそ超人に華麗なる蝶々に生まれ変わるんだ！！」

ビシィ！！

ヒムロの叫びにホムンクルスの本体がヒムロの額に飛んでくる。

ガシィ！

「「「「「！？！」」」」」

額からホムンクルスの本体が侵入したヒムロは、パンツ一丁になり次郎の顔を掴む。

「な…なんだ！いったい何が起きた！？」

「…綾崎君、君確か…もうこれ以上犠牲者は出さないと言ってたね、残・念」

バグ！

「ぎゃッ！？」

バサ　バサァ

次郎は服を残して消えてしまった。

ゲップ

ヒムロの手にある口の様なものがゲップをする。

「…フム」

ゴクン

「悪魔のように黒く
地獄のように熱く
接吻の様に甘い
これが人間の味か」

ヒムロがそう言うと

「「うわぁあああ！？」」

二人の黒服が叫び声を上げる。

「どうしましたハヤテさん？何が起こったんですか！？」

事態を理解できないソニアがハヤテに聞く。

「スイマセンソニアさん、あと一回戦わなきゃなくなりました」

「何ですって！？」

「時間ギリギリになりますけど、必ず解毒剤は持って帰ります！！」

黒死の蝶

スッ

「これで完成だ」

ヒムロが取り出した蝶々覆面を装着する。

「パピ！ヨン！」

「「この変態がッ！！」」

ジャカッ

二人の黒服が拳銃を取り出す。

「さすが冴木の黒服はいいモノ持っている」

バン！　バン！　バン！　バン！

黒服二人がヒムロに向かって何発もの銃弾を浴びせが

「意外とイタいね」

ヒムロには傷一つ付かない。

「正真正銘の化物だ！」

「ヒィィッ」

ヒュッ

「化物じゃなくて超人さ」

一瞬で移動したヒムロが黒服二人に言う。

「「ぎゃあああ！！」」

バシュウ！

「銃声と悲鳴、ハヤテさん…パピヨンが人間型ホムンクルスになってしまったんですね」

「…スイマセン」

「いいです、貴方のせいじゃない、それよりすぐに逃げて下さい、人と猿が全く違う生物である様に、人間型と動物型も全く別物、今の貴方ではもう対処できる相手じゃありません」

ソニアのその言葉にハヤテは

「はい、わかってま…す」

バシュウ

ヒムロの爪によりハヤテの体に無数の傷ができる。

ベロリ

ヒムロがハヤテの血の付いた指を嘗める。

「でもまだ解毒剤を手に入れてません、だから」

「止しなさいハヤテさん！」

ソニアが慌てて止めようとする。

「武装錬金！」

シィィン

「！？」

（武装錬金が発動しない！？）

グラッ

武装錬金を発動させようとしたハヤテだったが、発動せずに、体の力が抜ける。

「だから言ったんです…今の貴方は核鉄の治癒効果でやっと動ける状態」

（戦えるだけの力は残っていません！）

ゴン！

ソニアがそう言い、ハヤテが床に倒れる。

「武装錬金なしではホムンクルスは斃せない、勝負あったね」

グウウウ…

ヒムロの腹が鳴る。

「意外とエネルギーを喰う体だね、先に腹ごなしをすませるか、12時まで…あの女の人がホムンクルス化するまで、残りあと3時間、君はそこで今しばし自分の無力さに打ちひしがれていなよ」

ギィィィ…　バタン

ヒムロはハヤテにそう言って、去っていく。

「「！」」

廊下にいた黒服がヒムロに気付くが

「どうしたンスか？その格好」

「次郎サン」

弟の次郎と勘違いしている様だ。

バシュウ

黒服はヒムロに喰われてしまう。

「次郎ね…フン、ま、そっくりだからね、そうだな、よし僕と次郎と見分けられた者は助けてやろう、さぁて何人わかるかな？」

「次郎サン！」
「次郎サン？」
「次郎サン…」
「次郎サン☆」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
「次郎サン」
バシュウウウ　バシュウウウ
『ぎひゃあああああああっ！』

屋敷中にヒムロを次郎と呼ぶ声とヒムロが人を喰う音、そして悲鳴が響き渡る。

「次郎サンが化物になったァーーー！！」

バン！　バン！　バン！　バン！　バン！　バン！　バン！

黒服達がヒムロに向かって銃を撃つ。

「騒がしい！何を遊んでいるんだ」

書斎にいたヒムロの父が外の騒ぎに気を悪くしている。

「お父さん」

ヒムロに声をかけられたヒムロの父が振り向くと、パンツ一丁で蝶々の覆面をしたヒムロが立っていた。

「おお！素敵なスタイルだ次郎！今夜は何のパーティーだ？」

ドスッ

ヒムロの腕がヒムロの父を貫く。

「そうだね、強いて言うなら、故・冴木ヒムロを偲ぶ会」

「次……郎ォ…」

バシュウ

「なぁんだ、冴木ヒムロは今夜ではなく、とっくの昔に死んでいた訳か……じゃあここからはパーティーは2次会、超人パピヨンの生誕祭だ」

屋敷にいた人を片っ端から喰ったヒムロが言う。

「……テさん…ヤテさん」

「もしもし、ソニアさん…」

ソニアの呼びかけに気が付いたハヤテが答える

「今のうちです、逃げて下さいハヤテさん！」

「まだです！解毒剤を手に入れていません…ヒムロさんを倒さなきゃ…」

「いいです！私は覚悟はできてます、パピヨンは後継の戦士に任せるんです」

「でも、もう帰ってくるんです！早くここへ帰って来て下さい、貴方は力尽きるまでよくやりました」

ソニアのその言葉にハヤテは。

「携帯、泉さん達に変わって下さい」

「ハヤテ！やっぱ助太刀いるか？この東宮康太郎の真の力見せてやるぞ！」

「あーハヤテ？ベットの下にあった〔相撲ファイター　3月号〕そっと隠しといたよ、なんであんな本を隠してたの？もしかしてそんな趣味？」

「そんな本知りません！！」

「とりあえずハヤテ、帰りは裏から入って来い、お前最近寮監に目をつけられてるからヘマするなよ、後〔相撲ファイター　3月号〕をお前の部屋に隠したのは俺だ」

「何やってんですかワタル君！！」

「あ、ハヤ太君、ソニアさんなら大丈夫、任せて任せて、うん今丁

度リンゴ剥いてたところ、早く帰ってこないとなくなっちゃうよぉ」
そう言った泉がソニアに携帯を差しだす。
「はーい、ストロベリートーク続行」
「……」
「なんか少し力がわいて来ました！解毒剤を手に入れて必ず帰ります！」
「ハヤテさん」
「だからソニアさんの力を少し借ります」
「え？」
バキャ
ヒムロが戻ってくる。
「ちゃんと打ちひしがれたかい？まだ時間には早いけどやるコトが出来たんだ、超人パピヨンの生誕祭、こんな凍てつく闇夜にふさわしい、超特大のかがり火を焚こう
どうせ冴木ヒムロを必要としなかった世界だ、全て燃やして焼く尽くしてあげるよ！」
ヒムロは自分を必要としなかった世界を焼く尽くす気の様だ。
「ヒムロさん！」

「なんだい！？」

バッ！

ハヤテがソニアの核鉄を掲げる。

「！？」

「私の核鉄」

『ソニアさんの力借ります』

「W武装錬金！！」

ハヤテが自分の左胸の核鉄と左手で持ったソニアの核鉄で武装錬金を発動させる。

「決着を着けますよヒムロさん…これが僕の最後の一撃！！」

ハヤテの両手にはわずかに造形の違う突撃槍が一本ずつ握られている。

FADE TO BLACK

『決着をつけますよヒムロさん、これが僕の最後の一撃』

「ダブル・ランス、これはこれは…だが！」

「ハァハァ」

ボタ

「満身創痍、疲労困憊、せっかくのダブルランスもすぐに分解してしまいそうな程不安定」

ハヤテは正直言って戦える様な状態ではない。

「ハヤテさん…！」

（一気に体力を消耗している！このまま長期戦に持ち込まれたら戦う前に自滅！）

「それで勝とうなんて可笑しくて吹き出してしまいそうだよ！」

ゴパァ　ビチャビチャ

ヒムロが血を吐く。

「今のイヤな音…」

「ヒムロさんが血を吐きました」

「ハヤテさん…パピヨンに章印はありますか？」

「そう言えば何処にもないです…」

「そうですか…聞いて下さいハヤテさん、いやパピヨンオマエの変身は失敗です！完成前のホムンクルス本体を使ったコトで不具合が生じた！」

ソニアが電話越しにヒムロに言う。

「オマエの病気の体そのままで超人になってしまったんです“半不老不死の病気の体”で“半永久の痛みと苦しみ”をこの先ずっと味わい続ける、それが…大勢の命を犠牲にしてまで命を永らえようとした結果―報いだ」

ソニアの言葉を聞いたヒムロが言う。

「…しくじっちゃったね…けどまだ手段がある、目の前にホラ！もう一つの新しい命が！！」

スッ

「解毒剤は培養器背面のボックスの中、このカギ以外でムリに開ければ即ＢＯＭＢ！」

ヒムロが鍵を取り出す。

「さぁ来い！！君を喰って核鉄を手に入れてホムンクルス化した例の女性を従えて、この世界を焼き尽くしてあげるよ！！」

ペロリ

ヒムロが鍵を飲み込む。

「ハヤテさん」

「どれもこれもさせません！貴方を倒してくい止めます！！」

二人が激突する。

ハヤテの突撃槍をヒムロが左の掌で受け止め、さらにもう一本の突撃槍も右の掌で受け止める。

「！」

ハヤテはそのままヒムロを壁に叩きつけ、壁に縫い付ける。

ドガァ！！

突撃槍が刃はヒムロの左の掌を縫い付けたまま、刀を鞘から抜くように分離し、ヒムロに突きつけるハヤテ。

「ハァハァ」

「ハァハァ」

「バカな、不完全とはいえ超人の僕が、ただの人間の君などに…」

負けた事に驚くヒムロにハヤテが言う。

「ただの人間だけど、命懸けの戦いをくぐり抜けてココに来たんです、だから今まで自分では戦わなかった貴方より少しだけ強くなれました」

「…へぇ、で、強くなった君は僕を倒してどうする？ホムンクルスとなった僕は元に戻れないし人喰いも止められない、ましてやあの女性の解毒剤の鍵はもう腹の中だ出て来るまで待つのかい？さぁ君は僕をどうする？」

ハヤテは目を閉じ言う。

「すいません、冴木氷室さん」

（嗚呼…僕の名前……）

「謝るなよ、偽善者」

ヒムロがそう言う。

ドガァァァ！

ヒムロの体が壁ごと砕ける。

チャリン

鍵が地面に落ちる。

「ハァハァハァハ…」

ドサッ　ガ　ツーツー

携帯電話が落ち、通話が途切れる。

「ハヤテさん！？ハヤ…」

ハヤテは鍵を目前にして倒れてしまう。

（ソニ…アさん…『もう犠牲者は出さない』結局僕守れませんでしたけどソニアさんだけは…誰か…誰でもいいから解毒剤をソニアさんに……）

「よくやったアヤサキハヤテ」

意識の無いハヤテにそう言った人物が鍵を拾う。

コチ　コチ

時刻は１２時つまりタイムリミットの５分程前。

「それじゃあ俺達一旦部屋に戻るから」

「最近の騒動で色々と厳しくなってるんだ今」

「１２時の見廻りやり過ごしたらすぐまた来ますから」

ワタル達は１２時の見廻りやり過ごすために一旦戻る様だ。

「本当に一人で大丈夫？なんだかすごく疲れた様に見えるよ」

「大丈夫です、すいません心配かけて」

「うん…」

泉はソニアを心配するが、ソニアは泉に戻る様に言う。

パチッ

「じゃあまた後でね」

（…早く始末をつけなければ彼女達に危害を加えてしまう…）

電気の消えたハヤテの部屋でソニアは果物ナイフを掴む。

（せめて貴方は無事でいてください…ハヤテさん…）

「らしくない真似だな、戦士・ソニア」

そこに現れたのはテンガロンハット風の帽子・長手袋・襟の長いコート・スラックス・ブーツを全身に纏った、顔すら見えない男だった。

「戦士…長」

「解毒剤だ」

ポフ

戦士長と呼ばれた男がソニアに解毒剤を放る。

「アヤサキは安全な場所に移した、話は後だ、早く迎えに行ってやれ」

（……）

ハヤテが目を覚ます。

（陽光（ひかり）朝陽、朝…）

「！！！」

ハヤテの脳裏にソニアの後ろ姿が浮かぶ。

「あ、あ…」

ハヤテは涙を浮かべる。

「知っていますか？ハヤテさん貴方の武装錬金のエネルギー、間近で見ると太陽の光によく似た山吹色（サンライトイエロー）なんです」

眠っていたハヤテを膝枕していたソニアが言う。

「随分と遅くなりましたが、貴方のランスの名前“ＳＵＮＬＩＧＨＴ　ＨＥＡＲＴ”でどうです？」

「ソニアさん…！」

ソニアの無事を確認したハヤテは笑顔でそう言う。

「ありがとうございますハヤテさん、これで任務完了です」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4301p/

錬金の戦士ハヤテ

2010年12月19日02時37分発行